資料９

奈良県における取組について

（参考資料）

明日香における歴史展示の推進
～明日香における歴史展示等のあり方「基本方針」～

現状

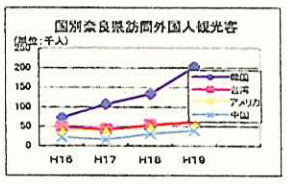
明日香の価値は、**“国家基盤が形成された地”**であるという**「歴史」**そのものにあるが、誰もが歴史を体感できる状況ではない。

価値あるものが地下に埋もれており、来訪者にとって明日香の意義や歴史がわかりにくい

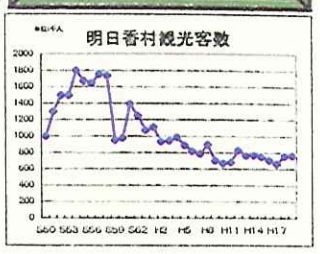
「歴史物の展示」はあっても、「歴史の展示」が不十分

東アジアから奈良を訪れる観光客は増加傾向にあるが、現地において東アジアとの“ゆかり”に関する情報が乏し

飛鳥京跡苑池の現状



観光客数が昭和50年代の年間180万人をピークに、現在は80万人前後で低迷



「明日香における歴史展示等のあり方基本方針」の作成と実施

歴史展示の推進

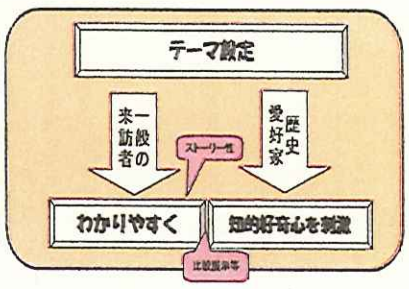
奈良県が主体となり明日香の価値である「歴史」そのものを展示する
～国内外、特に東アジアからの来訪者にも分かりやすい歴史展示を進める～

歴史展示の内容

展示する歴史の**テーマ**を設定し、テーマに即した**人物**（語り部あるいは中心人物）により、ストーリー性を持った展示内容とし、具体的には、万葉文化館等において、映像や音声等を用いわかりやすく解説する。

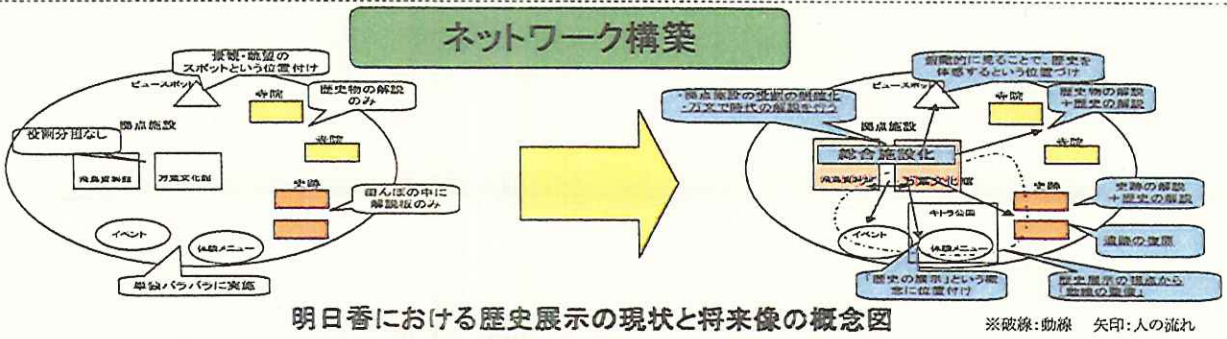
テーマ設定（語り部）

飛鳥の通史（太安万侶）
- 国家の源流（藤原不比等）
- 仏教の伝来と興隆（道昭）
- 東アジア文化の受容と変容（南淵請安）



歴史展示の手法

ネットワーク構築



明日香における歴史展示の現状と将来像の概念図　※破線：動線　矢印：人の流れ

展示施設の役割分担［（仮称）飛鳥歴史文化館］

県立万葉文化館を「飛鳥歴史文化館」と改称し、「歴史の総合展示施設」とするとともに、「明日香のゲートウェイ」と位置づけ所要の整備を行う

奈良県立万葉文化館

遺跡の復原整備

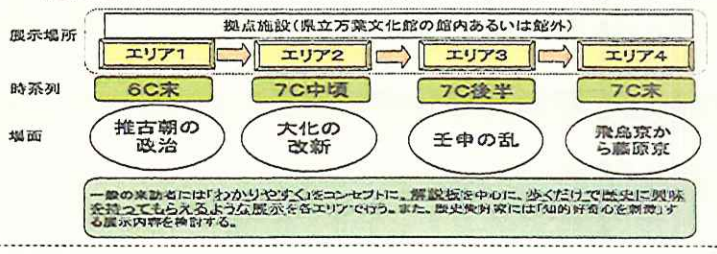
飛鳥京跡苑池等の飛鳥時代における重要遺跡を復原する

飛鳥京跡苑池
（H11発掘説明会での様子）

飛鳥京跡苑池イメージ図
（奈良県立橿原考古学研究所作成）

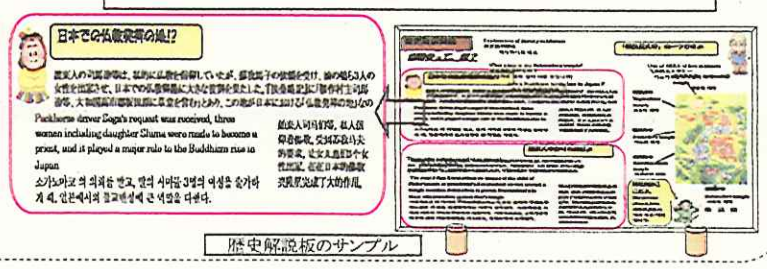
明日香歴史回廊

～歩いてわかる明日香の歴史～　県立万葉文化館を中心に、明日香の歴史テーマを回廊形式で展示する



寺院・遺跡等における歴史展示

「歴史」の解説板の整備。イラストや写真等を使用。日本語・英語・中国語・ハングルの4ヵ国表記を基本とする



歴史解説板のサンプル

目指すもの

歴史展示の推進により明日香の価値を高める

明日香における歴史的風土の維持・向上を図る

明日香における賑わいの形成を図る

明日香＝**中南和観光の拠点**
明日香を拠点に桜井・吉野・宇陀地域等へ

明日香での歴史展示を奈良全体に展開し、**明日香・奈良の魅力向上**
歴史展示拠点 北…奈良エリア、南…明日香

ポスト1300年祭における
奈良の観光力の向上

明日香における歴史展示等のあり方
基　本　方　針

平成２２年３月

奈　　良　　県

■目　次

Ⅰ　明日香の価値

■明日香の歴史 ～国家基盤が形成された地～　1
■明日香に対する取り組み　1～2

Ⅱ　歴史展示の目的

■明日香における歴史展示の現状　3～4
■検討の経緯　4～5
■歴史展示により目指すもの　6

Ⅲ　歴史展示の内容

■歴史展示のコンセプト　7
■歴史展示のコンテンツ（テーマ）　7～8
■人物（紀伝体）による歴史展示　8～10

Ⅳ　歴史展示の手法

■ネットワーク構築による歴史展示　11
■拠点施設のあり方　12～15
■明日香歴史回廊 ～歩いてわかる明日香の歴史～　16
■遺跡の復原整備　17～19
■寺院・遺跡等における歴史展示　20～21
■明日香における動線　21～22

Ⅴ　今後の展開

■明日香村整備基本方針・整備計画への反映　23
■今後の事業展開に向けて　23～24
■結び　24

明日香の歴史展示等のあり方検討会

■有識者

木下　正史	東京学芸大学特任教授
菅谷　文則	奈良県立橿原考古学研究所 所長
千田　稔	奈良県立図書情報館 館長
田辺　征夫	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 所長

■オブザーバー

深澤　芳樹	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）副部長
舟久保　敏	国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所 所長
藤田　尚	明日香村会計管理者、政策調整課長
北浦　敬教	明日香村文化財課長
舞鶴　正治	財団法人飛鳥保存財団 常務理事

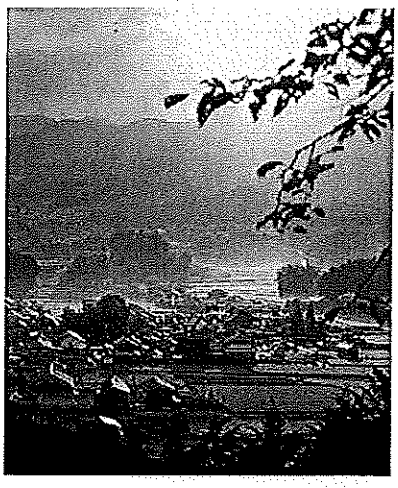
■奈良県

荒井　正吾	奈良県知事
中野　理	奈良県地域振興部 部長

Ⅰ　明日香の価値

■明日香の歴史　～国家基盤が形成された地～

推古天皇が豊浦宮に即位した５９２年から、持統天皇が都を藤原京に移した６９４年までの６世紀末から７世紀末に至る約１００年間を一般的に飛鳥時代と言いますが、この約１世紀の間、難波京と大津京に遷都された一時期を除いて、おおむね明日香村の区域内において都が営まれました。



（明日香村を遠望）

天皇という称号や日本という国号が初めて用いられ、律令が初めて制定されるなど、日本の古代国家体制が形成された地域であるとともに、仏教などの大陸文化の影響を受けいわゆる飛鳥文化が開花した地域、それが奈良県明日香村です。

明日香において、国家の基盤が形成されました。
明日香の価値は、まさにこの歴史そのものだと言えます。

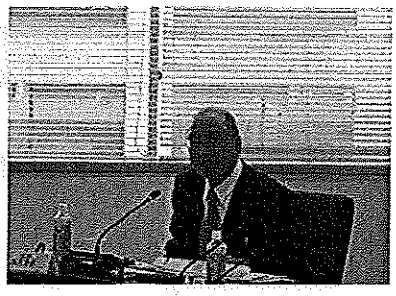
■明日香に対する取り組み

我が国の律令国家体制が初めて形成された時代の政治の中心地である明日香村においては、大陸文化や飛鳥文化を構成する宮殿、寺院、古墳、飛鳥川、甘樫丘などの歴史的文化遺産と周辺の環境が一体となった他に類例を見ない貴重な歴史的風土を形成しています。

この歴史的風土を国民の資産として、開発の波から守り良好な状態で保存するとともに、この風土を末永く後世に伝えるため、昭和５５年に明日香村特別措置法が制定されました。

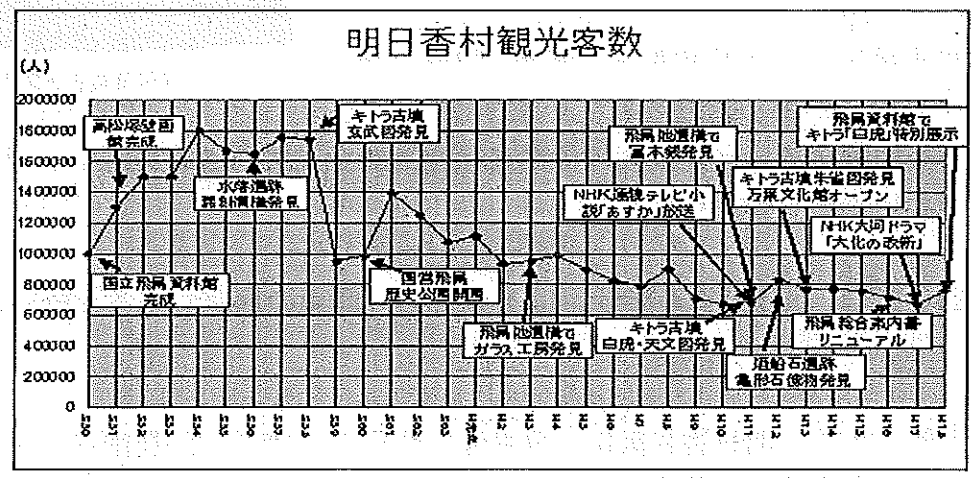
明日香村特別措置法及び奈良県が制定した風致地区条例等の規制、そして何よりも明日香村民の歴史的風土に対する理解と協力により、概ね良好に歴史的風土が守られ、また、昭和５５年度以来、奈良県が３次にわたり策定した明日香村整備計画により、道路や上下水道等の生活環境や産業基盤の整備が図られるとともに、文化財の発掘や文化観光施設の整備が進められ、明日香村の生活水準の向上に一定の成果をみたところです。

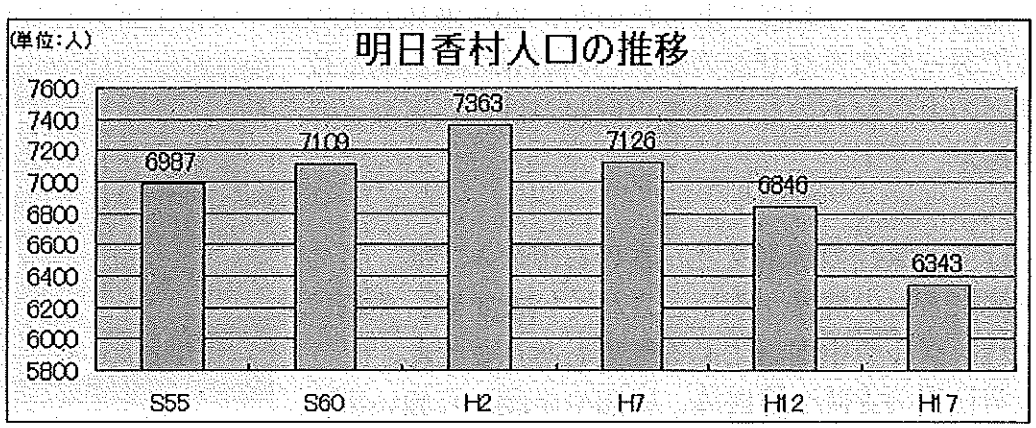
なお、現行の第３次明日香村整備計画が平成２１年度に終期を迎えるにあたり、国土交通省の社会資本整備審議会に「明日香村小委員会」が設置され、平成２０年１０月以降、「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等を今後一層すすめるための方策はいかにあるべきか」について、４回にわたって審議されてきました。



（明日香村小委員会での荒井知事）

明日香村を訪れる観光客数は、昭和５４年には１８０万人を数えましたが、現在は７０万人台で推移しています。最近は、奈良文化財研究所飛鳥資料館（以下、「飛鳥資料館」という。）におけるキトラ古墳壁画の特別展示により若干の増加が見られますが、全体傾向としては右肩下がりの状況にあります。このような観光客数の減少に加え、定住人口の減少や高齢化の進展等に伴う地域活力の減退、また厳しい明日香村の財政状況を踏まえ、平成２１年７月に、「整備計画の推進、及び国の貴重な財産である歴史的風土の保存のために、引き続き国、県の支援は不可欠」との答申がなされたところです。





※明日香村小委員会

○設置：H20.9.25、諮問：H20.9.25、答申：H21.7.16

○第１回：H20.10.17、第２回：H21.2.10、第３回：H21.4.17、第４回：H21.5.29

○委員　越澤 明（北海道大学大学院教授）、荒井 正吾（奈良県知事）、
関 義清（明日香村村長）、木下 正史（東京学芸大学特任教授）ほか

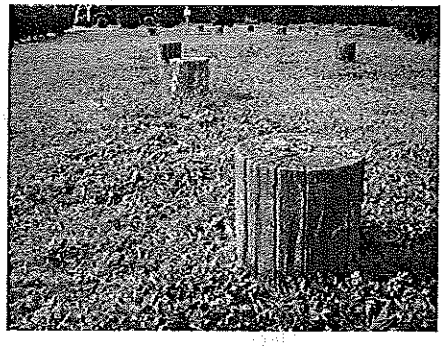
Ⅱ　歴史展示の目的

■明日香における歴史展示の現状

明日香の価値は歴史そのものにあると言っても過言ではありません。しかし、歴史に関する基礎知識等があまりない一般の来訪者にとって、明日香を歩いても明日香の歴史、そして価値が理解できないのではないでしょうか。

掘り出された土器のかけらや木簡等の遺物、かつての建物の柱跡や礎石等の遺構、宮殿跡や寺院跡等の遺跡。明日香には「歴史物」が多数残っています。

例えば、伝飛鳥板蓋宮跡には、後飛鳥岡本宮及び飛鳥浄御原宮の柱の跡などが復原されています。しかし柱の跡を見ても当時の宮殿を想像することは難しいのではないでしょうか。



（伝飛鳥板蓋宮跡）

また、飛鳥板蓋宮では古代史最大の事件である大化の改新（乙巳の変）があったとされていますが、大化の改新に関する知識がないと、現在の伝飛鳥板蓋宮跡を見ても当時の歴史を理解し、体感していただけないというのが実情です。

明日香においては、「歴史物の展示」はあっても「歴史の展示」が不十分であるといえます。

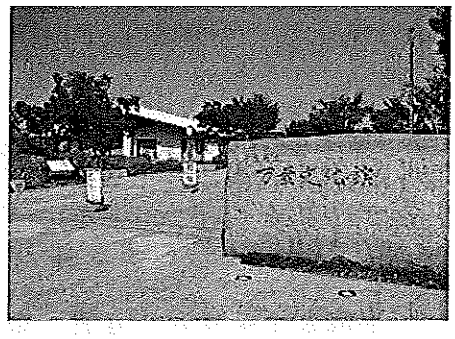
もう一つの例として、明日香村阪田に飛鳥五大寺の一つであった坂田寺跡があります。発掘調査により、奈良時代の仏堂や回廊が確認されていますが、それが現地においてどれくらいの規模でどんな配置であったのか、また飛鳥五大寺の一つに上げられるほど価値の高い寺院であったのはなぜなのか、このお寺の歴史的な位置づけはどのようなものなのか等の解説がほとんどなされていません。

（坂田寺跡の解説板）

現地に行くと数行の解説文と一本の石碑のみです。この坂田寺も渡来人との関係が深いとされていますが、英語はもとよりハングルや中国語による解説もありません。

多くの明日香の寺院や遺跡等、韓国や中国から強い影響を受けているということは歴史上明らかであるにもかかわらず、韓国や中国から来られた歴史に興味のある方の立場からすると、現地に赴いてもハングルや中国語での解説も不十分であり、書いてあったとしても韓国・中国との“ゆかり”に触れられておらずがっかりしたという話しも聞くところです。

また、明日香村内には、飛鳥資料館や奈良県立万葉文化館などの展示施設があります。しかし、明日香の「歴史」を展示するという視点に立ったとき、設置主体の違いもあり、施設間での役割分担は明確でなく、また施設内での展示と寺院･遺跡等での展示の連携が意識されていないのが現状です。



（奈良県立万葉文化館）

見るだけでは理解がしがたい「歴史」というものを、様々な手法によって展示することが必要であり、そのためには、貴重な文化財、特に地下にあるものをわかりやすく解説する、あるいは建物や遺構などを復原することも必要です。

明日香ファン、歴史愛好家であれば、明日香を歩けば明日香の歴史がわかるかもしれません。しかし、一般の来訪者の方々にとって、個々の遺跡や寺院あるいは展示施設を訪れても、それらにおいて体系立った展示が行われていないため、明日香のきれいな田園風景を楽しむことは出来ても、明日香の価値そのものである「歴史」がわからないまま、帰路につくケースが多いものと思われます。

歴史の展示で来訪者に感動を与えたい。これが奈良県において歴史展示のあり方を検討するに至った一番の理由です。

■検討の経緯

奈良県では、第４次明日香村整備計画を策定するにあたり、明日香での歴史展示の現状を踏まえ、第Ｉ章で述べた「明日香村小委員会」において問題提起を行いましたが、明日香における歴史展示等については、奈良県が中心となって国・村等関係機関の協力を得ながら、歴史展示等のあり方に関する検討を行うべきとの議論がなされました。

このため奈良県では、平成２１年４月に「明日香村の歴史展示のあり方有識者座談会」を開催し、明日香の意義と歴史展示の重要性について議論するとともに，６月には、「明日香の歴史展示等のあり方検討会」（以下「あり方検討会」という。）を設置し、我が国の国家基盤が形成された地である明日香を、国家形成の経路が体感でき回想できる地として後世に残していくため、「歴史展示等のあり方」について検討を行いました。

「あり方検討会」は奈良県知事及び有識者等で構成され、平成２１年６月、８月、１１月の３回にわたって検討を行いました。

もちろん、明日香の歴史展示は奈良県だけが行っていくものではありません。国土交通省や文化庁、そして明日香村などの関係機関が一体となって取り組んでいく必要がありま

す。このため、奈良県としては、関係機関の共通認識の醸成を図るため、「明日香の歴史展示等のあり方基本方針」を策定しました。

※「明日香村の歴史展示のあり方有識者座談会」

・平成２１年４月１０日　奈良県庁

上野誠（奈良大学教授）、菅谷文則（奈良県立橿原考古学研究所所長）、千田稔（奈良県立図書情報館館長）、増井正哉（奈良女子大学教授）、和田萃（京都教育大学名誉教授）、荒井正吾（奈良県知事）

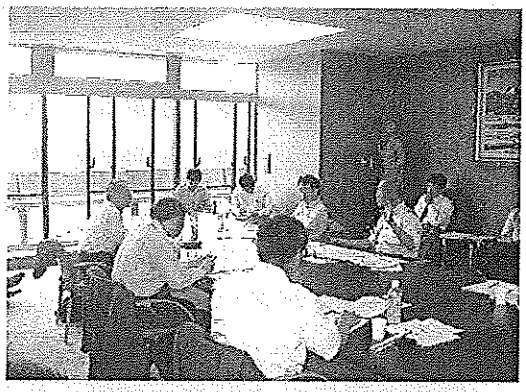
・平成２１年４月１４日　奈良県東京事務所

石澤良昭（上智大学学長）、佐藤信（東京大学教授）、田辺征夫（奈良文化財研究所所長）、荒井正吾（奈良県知事）

※「明日香の歴史展示等のあり方検討会」

・有識者

木下正史（東京学芸大学特任教授）
菅谷文則（奈良県立橿原考古学研究所所長）
千田稔（奈良県立図書情報館館長）
田辺征夫（奈良文化財研究所所長）



（明日香の歴史展示等のあり方検討会）

・オブザーバー

奈良文化財研究所都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
　深澤芳樹（都城発掘調査部副部長）
国土交通省近畿整備局国営飛鳥歴史公園事務所
　舟久保敏（国営飛鳥歴史公園事務所所長）
明日香村
　藤田尚（会計管理者　政策調整課長）
　北浦敬教（文化財課長）
財団法人飛鳥保存財団
　舞鶴正治（常務理事）

・奈良県

荒井正吾（奈良県知事）、中野理（奈良県地域振興部長）

（以下敬称略）

※関係各課

地域づくり支援課、観光振興課、ならの魅力創造課、国際観光課、文化課、土木部総務室、道路・交通環境課、河川課、公園緑地課、文化財保存課

○第１回検討会　平成２１年６月１１日

議題：歴史展示の対象、遺跡の復原 など

○第２回検討会　平成２１年８月１０日

議題：展示する歴史の中味（テーマ、キーワード）
　　歴史を展示する手法（拠点施設の役割分担、遺跡復原） など

○第３回検討会　平成２１年１１月２４日

■歴史展示により目指すもの

奈良県を訪れる観光客は、年間約３，５００万人ですが、その３分の１以上の１，３８０万人は奈良市を訪れています。平成２２年には、平城宮跡を中心に歴史をテーマとしたイベント＝平城遷都１３００祭が開催されますが、平城宮跡すなわち奈良市を訪れた観光客を、我が国の国家基盤が形成された地である明日香をはじめ、県内各地へ導くことが必要です。

このため平城遷都１３００年祭においては、「奈良歴史探訪回廊」として、県内各地の歴史、文化、自然等の様々な素材を活用し、「巡る奈良」をキーワードに、「宮」の変遷や世界遺産をはじめ、県内各地で地域の特性を活かしたイベント等を行うこととしています。

１３００年祭は平成２２年だけのイベントですが、大切なのは、その後の取り組みです。

奈良県の北における歴史展示の拠点を奈良エリア（平城宮跡及び奈良県立美術館）とするのに対し、奈良県の南における歴史展示の拠点は明日香です。明日香を歴史展示の拠点のみならず中南和観光の拠点と位置づけ、１３００年祭の終了後においても、県内周遊観光ネットワークの強化を図っていくことが必要です。

奈良、そして明日香の価値は歴史です。

昭和４５年、明日香に魅せられ明日香の地に移り住んだ大阪の漢方医御井敬三（みいけいぞう）氏が、明日香村の保存を訴える“声の直訴状”を当時の佐藤栄作首相に送られましたが、その中で「日本の国の成り立ちから、日本の国がどういう国がらであるかを知ることは、日本人にとって最も大切な事柄」と書かれてあり、明日香の歴史展示を進めることは、我が国の歴史に対する認識を深めることに繋がります。

歴史展示は明日香だけの課題ではありません。奈良県全体、ひいては我が国全体の課題です。今回検討した明日香における歴史展示の基本方針を参考に、今後、奈良県全体の歴史展示という課題に向けた検討を行うことも必要です。

歴史展示という取り組みを行うことで、より多くの方々に明日香や奈良が持っている「歴史的な価値」や「東アジアとのゆかり」を体感し回想していただこうとするものです。

明日香における歴史展示の目的

明日香の意義や歴史認識が理解し難い状況
（明日香に来ても歴史がわからない…）

→

国家基盤の形成の地である明日香を、国家形成の経路が体感でき回想できる地として後世に残すことが必要

→

○明日香＝中南和観光の拠点
→中南和地域の振興
○歴史展示のモデル構築
→奈良県全体へ広める

Ⅲ　歴史展示の内容

■歴史展示のコンセプト

御井敬三氏は、前述した“声の直訴状”の中で「明日香の古京を逍遥すれば誰しも日本のこの国が如何にして形成され、如何なる経路を辿ってきたかを回想せずにはおられない」とも書かれています。

この書簡がきっかけとなり、昭和５５年の明日香法制定に繋がったということで、まさに飛鳥保存の恩人というべき人物の言葉ですが、一方で、すべての人が明日香を歩けば国家形成の経路を回想することが出来ないのも事実です。

これまでの明日香観光は、いわゆる明日香ファン・歴史愛好家中心に支えられきましたが、歴史愛好家の方には、これまで以上に明日香の価値を認識していただけるような展示に努めるとともに、奈良県など行政機関は、一般の来訪者に対しても、明日香に来れば明日香の歴史を体感でき、明日香の価値を認識していただけるような展示に努めることが必要と考えます。

このため、**明日香の「歴史展示」においては、一般の方には「わかりやすく」、歴史愛好家の方には「知的好奇心を刺激する」ことをコンセプトにします。**

歴史展示の対象者としては、歴史愛好家も含めた、国内外からの観光客など幅広い来訪者とします。特に一般の来訪者に明日香の歴史を体感してもらうため、展示する歴史の内容は、基本的に中学校あるいは高等学校の教科書レベルとし、事前の学習が十分でなくても、明日香に来れば、明日香の歴史をわかりやすく、そして楽しく学ぶことができるようなシステムを構築します。

また、歴史愛好家の方に対しては、中国・朝鮮半島との比較展示等の手法により、知的好奇心を満たすこととします。

これらの取り組みの指針となるものが、この「明日香の歴史展示等のあり方基本方針」であり、県としてはこの基本方針に従って歴史展示を推進するとともに、国や明日香村、広く寺院等の民間における歴史展示のガイドラインとなることを期待します。

■歴史展示のコンテンツ（テーマ）

来訪者に歴史をわかりやすく楽しく体感してもらうためには、歴史展示を「内容（コンテンツ）」と「手法」の二つの視点から検討する必要があります。

一つ目の「展示する歴史のコンテンツ」についてですが、

一口に飛鳥時代と言っても、多くの歴史上の事件・事象があり、また多くの人物が登場することは言うまでもありません。そのような中で、どんな切り口で歴史を展示するのかを定めなければなりません。

そのため、「あり方検討会」では、先に述べた歴史展示のコンセプトに則り、まず「展示する歴史のコンテンツ」についてを議論を行い、別紙1のとおり**「国家の源流」「仏教の伝来と興隆」**及び**「東アジア文化の受容と変容」**という飛鳥時代を象徴する3つのテーマを設定し、それぞれのテーマごとにキーワードを設定しました。なお、これらテーマ及びキーワードは、中学校・高等学校の教科書等で見られるテーマ設定を基本としています。

例えば、「仏教の伝来と興隆」というテーマに対して、崇仏論争や仏教興隆策などのキーワードを設定し、これらキーワードから、飛鳥時代における「仏教の伝来」を来訪者に理解してもらうことを目指します。

■人物（紀伝体）による歴史展示

テーマを展示する場合、その説明の仕方というものが論点となります。歴史を年代ごとに追う形、いわゆる編年体で説明する方法もありますが、歴史を動かし形をつくるのは基本的に人であり、一般の来訪者に明日香の歴史を「わかりやすく」展示するためには、代表的な人物に焦点をあててテーマを説明するという紀伝体の手法が有効だといえます。

まず、「国家の源流」「仏教の伝来と興隆」「東アジア文化の受容と変容」という3つのテーマ及び「飛鳥時代の通史」を語る人（＝語り部）というものを設定します。

通史及び3テーマの語り部の候補については、別紙1のとおりとします。

- 「飛鳥時代の通史」に関しては 太安万侶
- 「国家の源流」というテーマに関しては 藤原不比等
- 「仏教の伝来と興隆」というテーマに関しては 道昭
- 「東アジア文化の受容と変容」というテーマに関しては 南淵請安

具体的な展示方法については、映像等の中でその人物が、テーマに関連するキーワードや人物を“わかりやすく”音声で語ることとします。基本的には中学校教科書レベルの内容とし、後述する県立万葉文化館（歴史展示の総合拠点施設）において、明日香を訪れた一般の来訪者を主対象に、明日香の歴史を概略的に展示することとします。語り部によるストーリー(案)については、別紙2のとおりです。

次に、一般の来訪者だけでなく、歴史愛好家の方の知的好奇心を刺激する展示として、テーマにふさわしい中心人物を取り上げ、その人物をとりまく脇役と相まってテーマを語るためのストーリーを作成し、県立万葉文化館施設あるいはその人物と縁のある寺院や遺

跡等において、パネル展示やイラスト、映像などによって展示することとします。

なお、テーマに従って取り上げる中心人物例については、別紙１のとおりです。

・「国家の源流」というテーマに関しては
　推古天皇、天智天皇（中大兄皇子）、天武天皇（大海人皇子）、藤原不比等
・「仏教の伝来と興隆」というテーマに関しては
　蘇我稲目、聖徳太子（厩戸皇子）
・「東アジア文化の受容と変容」というテーマに関しては
　南淵請安、観勒、柿本人麻呂

例えば、「仏教の伝来と興隆」というテーマに対しては、聖徳太子（厩戸皇子）という人物を取り上げますが、太子を取り巻く登場人物＝脇役として、推古天皇、蘇我馬子と小野妹子を設定し、基本的には高等学校までの教科書レベルでストーリーを作成します。その際、「仏教の伝来と興隆」というテーマをより理解してもらうのにふさわしい場面設定を行うなど、メリハリのつけたストーリー作成に心掛けるものとします。人物によるストーリー案については別紙３のとおりです。

なおこの場合、展示するのは聖徳太子という人物ですが、聖徳太子という人物を紹介するのが目的ではなく、あくまでも歴史のテーマ、この場合は「仏教の伝来と興隆」という歴史の大きな流れを来訪者にわかっていただくことが目的です。

このように、県立万葉文化館においては、語り部によるテーマ説明や中心人物について映像やパネル等により展示するとともに、明日香村の地図を掲示して現地（寺院や遺跡）への誘導を図り、さらに「ゆかり」を示す東アジアの地図も掲示します。また、聖徳太子を例にとると、より身近に聖徳太子という人物を体感してもらうために、例えば聖徳太子のフィギアを設置したり、聖徳太子に縁の深い場所である小墾田宮跡や橘寺において、それぞれの場所にふさわしい解説を行うこと等を検討します。

明日香を歩けば、その歴史に縁の深い人物の展示がいたるところにあり、歴史にあまり興味のない一般の来訪者であっても、人物を通して明日香の歴史、例えば「国家の源流」というものがわかり、再び明日香を訪れた際には、別の人物を通じて「仏教の伝来と興隆」がわかる…。そのような展示の工夫が必要です。

また、「国家の源流」というテーマに関しては、例えば国家を構成する要素の一つである徴税権について、当時における税金と今日の税金を比較して展示するなど、「比較展示」によりわかりやすく展示する工夫も必要です。

明日香には、繰り返し訪れるだけの価値＝歴史がありますが、来訪者が「繰り返し訪れたい」と思えるシステムの構築が必要です。

明日香における歴史展示等のあり方

現状

奈良や明日香を訪れても、「歴史物（遺跡等）の展示」はあるが、「歴史の展示」がないため、その意義や歴史認識が理解しがたい状況にある

明日香は、"国家基盤形成の地"という非常にグレードの高いものであるにもかかわらず、一般の来訪者には分かりにくい

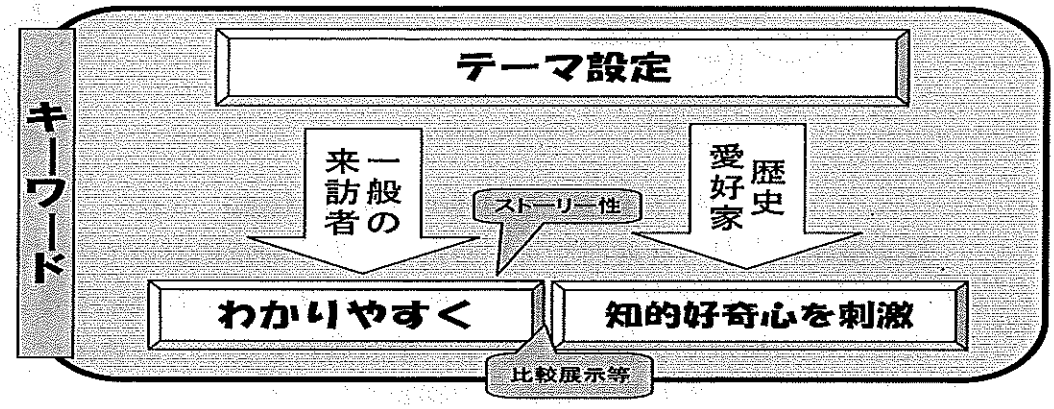
方向性

展示する歴史のテーマを設定し、わかりやすく歴史を体感できる仕組みが必要

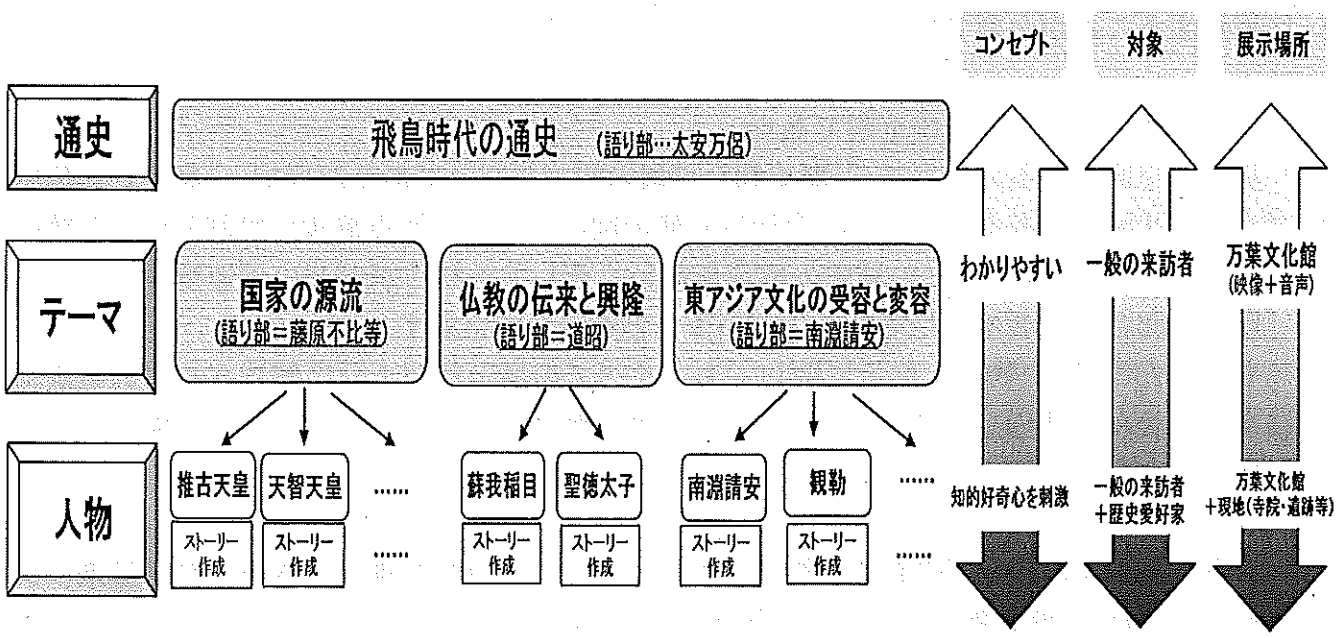
※テーマの例示
「国家の源流」、「仏教伝来」など

具体的取組

例えば、テーマに即した人物を主役にして、ストーリー性を持った展示内容（編年体ではなく、紀伝体）を検討する

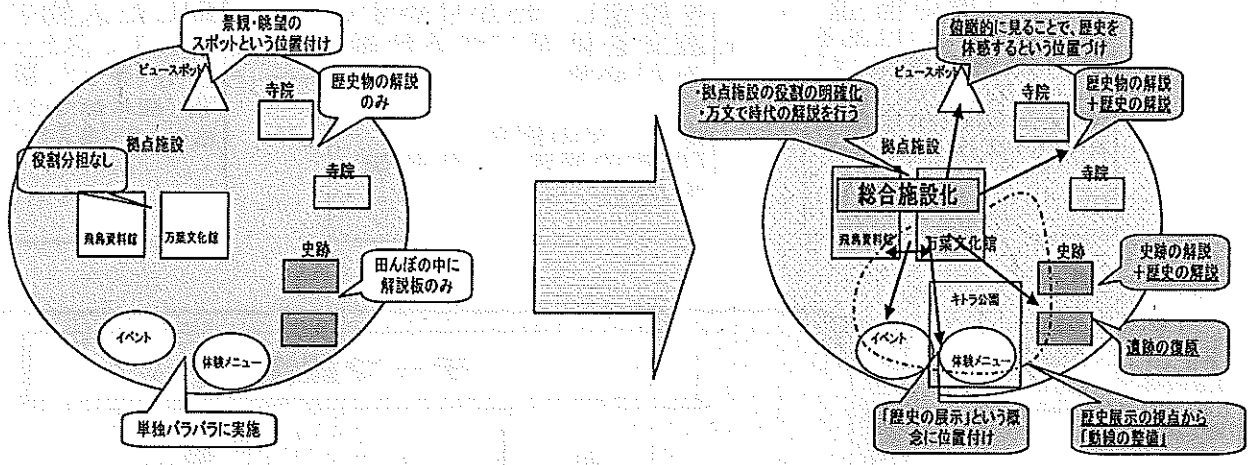


人物（紀伝体）による歴史展示



Ⅳ　歴史展示の手法

■ネットワーク構築による歴史展示



（明日香における歴史展示の現状と将来像の概念図）　　※破線：動線　　矢印：人の流れ

歴史展示のあり方を検討するにあたり、まず前章において内容面での検討を行い、明日香の３つの大きな歴史テーマを、人物（紀伝体）により展示することとしました。

次に、その展示する歴史の内容を、明日香村において具体的にどのような方法で展示するのかについて「あり方検討会」で議論を行いました。

先に指摘したとおり、明日香の価値は「歴史」そのものにあるにもかかわらず、発掘された土器や木簡、また寺社や遺跡などの「歴史物」は多数存在しても、「歴史」そのものの展示が充分になされていません。

「歴史」そのものを展示するためには、

施設間の役割分担により各施設において歴史を総括的かつ俯瞰的に展示するとともに、一部遺跡の復原、また寺院等における歴史解説などによって、明日香の「歴史」を多面的に展示することが必要です。

それを概念化したものが上図であり、

現状は左側にあるのように“「歴史物」の展示がバラバラにあるだけで、「歴史」が体感できない状況”であるのに対し、今後は右側の図のように“拠点施設の役割分担や遺跡の復原、また寺院･遺跡等での歴史の解説を行い、そしてそれらがお互いに連携することで「歴史を総合的に展示」していく”ということを示しています。

もちろん、「歴史物」の展示に関しても、すべての展示物が十分に解説されている訳ではありません。「歴史」の展示と合わせて、「歴史物」の解説についても充実を図ることが必要です。

「拠点施設及び現地（遺跡や寺院等）がネットワーク（相互連携）された歴史展示システム」。これが、明日香における歴史展示の手法ということになります。

■拠点施設のあり方

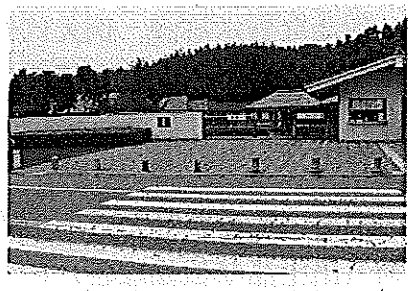
明日香村内における規模の大きい展示施設としては、飛鳥資料館、県立万葉文化館、そして現在整備を行っている国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区での施設（以下、「キトラ公園」という。）の３つがあります。

※県立万葉文化館

・平成１３年オープン
・運営：財団法人 奈良県万葉文化振興財団
・万葉集を軸とした古代文化に関する総合文化拠点
万葉集に関する調査・研究機能のほか、わが国を代表する日本画家が描いた万葉日本画の展示を行っている。

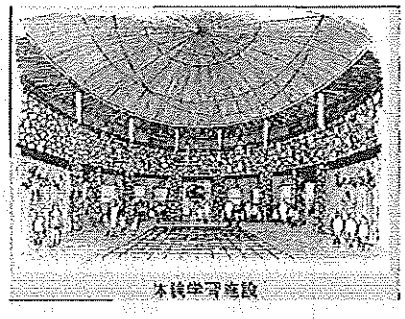
※飛鳥資料館

・昭和５０年オープン
・運営：独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
・飛鳥の歴史と文化を分かりやすく学べる資料館。宮殿、寺院、遺跡などの復元模型や出土品を展示している。



※キトラ公園

・平成２８年度を目途に整備中
・整備：国土交通省 国営飛鳥歴史公園事務所
・キトラ古墳や檜隈寺跡などの歴史資産を生かしつつ、東アジアとの交流で培われた古代飛鳥の歴史文化の体験を通じ、学習できる公園として整備中



これら明日香における展示施設＝拠点施設について、次のような役割分担を基本とします。

県立万葉文化館	歴史の総合展示施設 歴史テーマや人物等により「歴史」を総合的に展示する施設
飛鳥資料館	歴史物の総合展示施設 明日香村における出土品等の「歴史物」を総合的に展示する施設
キトラ公園	歴史を体験・学習する施設 歴史物の鑑賞をはじめ各種体験を通じ歴史を学習する施設

○県立万葉文化館の今後のあり方

現在の県立万葉文化館は、前述のとおり万葉集を軸とした古代文化に関する文化施設という位置づけです。とはいえ、事前の発掘調査で明らかになった「飛鳥池工房遺跡」について、発掘調査時の状態を実物大で復原するとともに、特別展示室において日本最古の鋳造銭「富本銭」（レプリカ）などの展示も行っており、歴史物に関する展示施設という役割も担っています。また、平成２１年５月からは、中南和地域の観光情報を発信する「インフォメーション明日香」をエントランス内に開設するとともに、コンシェルジュ（窓口対応者）１名を配置し、明日香村内の観光案内や中南和地域のイベント情報等の提供を行っています。

前章で述べた３つの歴史テーマ（「仏教の伝来と興隆」など）、あるいは人物（聖徳太子（厩戸皇子）など）を展示する場合、施設外でまとまった展示を行うことは物理的に困難であり、やはり施設内において、パネルや映像、またレプリカ等で展示することが望ましいと言えます。

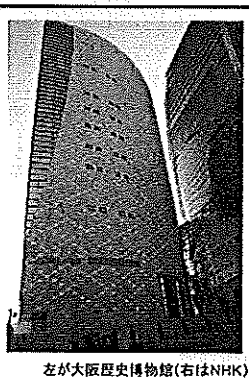
新たな展示施設、例えば他府県等で見られる「歴史博物館」を開設することも考えられますが、ロケーション等から既存の県立万葉文化館を有効に活用することが現実的な対応と考えられます。

なお、他府県等の「歴史博物館」は、歴史そのものの展示機能も有していますが、歴史物（出土品や仏像など）の展示も行っているところが多く見られます。

※近畿における歴史博物館の例

大阪歴史博物館	住所	大阪市中央区大手前	設置主体	大阪市	展示面積	23,606㎡
	開設(改装)	平成13年11月	運営主体	(財)大阪市文化財協会		

歴　史　展　示

展示テーマ・コンセプト	後期難波宮(奈良時代 744～)の大極殿を原寸大で復元 遷都の日に行われたであろう宮廷儀式を映像で再現 7～10Fのうち、10F全体が古代フロア…9F 中世近代、8F発掘体験、7F近代現代						
展示手法	パネル	映像	レプリカ	タッチパネル式	パソコン	ジオラマ	その他
	○	○映像が多数あり	○大極殿そのものを復元	○多数あり	○各所に多数あり	○前期・後期難波宮	官人(役人)の人形が多数
歴史物展示	難波宮から発掘された瓦、土器、漆容器など						
展示の特徴(写真等)	 左が大阪歴史博物館(右はNHK)						

メインの「遷都の日の宮廷儀式」再現においては、音声による解説がなく映像と音楽のみで展示。約4分間

電動カーテンが下りる → ①唐 長安での宮廷シーン → ②新羅 慶州での宮廷シーン → ③(後期)難波宮での遷都の儀式 → ④(後期) 難波宮の復元図と現在の大阪がオーバーラップ → 電動カーテンが上がる…眼下に難波宮史跡公園を見下ろす

兵庫県立歴史博物館	住所	兵庫県姫路市(姫路城北側)	設置主体	兵庫県	展示面積	7,466㎡
	開設(改装)	昭和58年4月 平成19年4月リニューアル	運営主体	兵庫県		

歴　史　展　示

展示テーマ・コンセプト	建物は建築家丹下健三の設計。現代の城をイメージ 常設展示室では原始から近現代に至るまでの兵庫県の歴史を中心に展示 また姫路城をはじめとする日本全国の城郭を紹介						
展示手法	パネル	映像	レプリカ	タッチパネル式	パソコン	ジオラマ	その他
	○	○	○	○	○	○お城の模型	
歴史物展示	仏像や木簡、土器など多数。姫路城に関する「歴史物」展示が充実。また「こどもはくぶつかん」と称して、懐かしい駄菓子屋のような展示物もあり。						
展示の特徴(写真等)	 歴史博物館 建物	世界文化遺産「姫路城」に関する展示が充実					

このように、「歴史展示」が中心となるような展示施設は全国的にもあまり例がないものと考えられますが、県立万葉文化館を**「歴史の総合展示施設」**と位置づけ、明日香の歴史展示の中心施設として、前章で検討した歴史テーマ及び人物を展示する施設とします。

具体的な展示場所、展示方法等については、今後の課題となりますが、

例えば、現行スペースの一部を「歴史展示室」とし、歴史テーマごとにコーナーを設け、年表や関連史跡・遺物の写真・イラスト、関連地図などを記載したパネル展示、テーマに即した人物の説明や、その人物のフィギアやレプリカ等の設置、映像情報なども交えることで、県立万葉文化館を「明日香の歴史学習の玄関口」と位置づけます。

一般の来訪者、特に修学旅行生を例にとると、

観光バスあるいは電車・路線バスを乗り継いで明日香に来た生徒は、まず県立万葉文化館で明日香の歴史の概要を学んでもらうことになります。

そして、県立万葉文化館を拠点として、徒歩やレンタサイクル等によって、それぞれのテーマあるいは人物に関連する現地（寺院や遺跡)、飛鳥資料館など他の拠点施設等に移動し、それら移動先において、県立万葉文化館での歴史解説と整合した詳しい解説、あるいは本物の遺跡･遺物の復原現場等を見ることで、明日香の歴史そのものを体感してもらうということになります。

また、県立万葉文化館が歴史展示の総合展示施設としての機能を持つ以上、平成２１年度から取り組んでいる**案内機能の充実**も必要です。明日香村内の各拠点施設や寺院や遺跡の情報だけでなく、イベントや体験メニューに関する情報を発信する明日香歴史探訪の総合案内機能を持たせるとともに、明日香を奈良県中南和地域の観光拠点としていることから、中南和地域に関する観光情報発信機能の充実を図ることも必要です。

○飛鳥資料館のあり方

飛鳥資料館は、“飛鳥地域”の資料館ということで、明日香村だけでなく山田寺跡（桜井市）の出土品なども展示するとともに、前庭には明日香村から出土した須弥山石、酒船石、猿石などのレプリカを展示するなど、「歴史物」の展示施設として高い機能を有しています。

一方、出土品等の「歴史物」は、発掘した主体がそれぞれの施設で展示を行っているという現実があります。従来から、明日香村における発掘調査は、奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会の三者がそれぞれ行ってきました。このため、明日香の出土品は、橿原市畝傍町にある「奈良県立橿原考古学研究所付属博物館」や明日香村大字飛鳥にある「明日香村埋蔵文化財展示室」などにも別々に展示されています。

来訪者の立場で明日香における「歴史物展示」のあり方を考える時、明日香村内にある展示施設である飛鳥資料館は、「明日香における「歴史物」の総合展示施設」としての位置づけることが望まれます。

設置主体の違いから、出土品の移管等については難しい問題はあるでしょうが、出来る範囲で三者が協力し、飛鳥資料館における展示スペースの強化により、例えば橿原考古学研究所や明日香村埋蔵文化財展示室が保有する出土品や資料を飛鳥資料館で展示することも将来の課題として検討することが必要です。

○キトラ公園のあり方

キトラ古墳周辺地区については、国営飛鳥歴史公園事務所により、平成１８年３月に「キトラ古墳周辺地区基本計画」が策定されました。

この中で、
「キトラ古墳の保存と活用、及び檜隈寺跡などの周辺の歴史資産を生かし、東アジアにおける交流で培われた歴史が訴える古代の時空間と生活文化の、歴史と共に育まれた風土の中における体験・学習、あわせて交流を通じた地域の活性化に資する公園づくり」と整備テーマが定められています。また、園内の体験学習館が位置する歴史体験学習エリアでは、様々な歴史的文物の展示等を行うほか、屋内外での体験的歴史学習の中心となる施設を整備することが考えられています。

歴史を体感するためには、知識として学ぶだけでなく、展示物や遺跡を見て感じ、また古代の生活文化等を追体験することは非常に有効な手段です。具体的な展示内容等については、今後国営飛鳥歴史公園事務所によって検討されますが、明日香における他の拠点施設（県立万葉文化館、飛鳥資料館）とネットワーク構築が図られるよう、今後、国営飛鳥歴史公園事務所・奈良文化財研究所・奈良県の三者が連携・協力していくことが求められます。

■明日香歴史回廊　～歩いてわかる明日香の歴史～

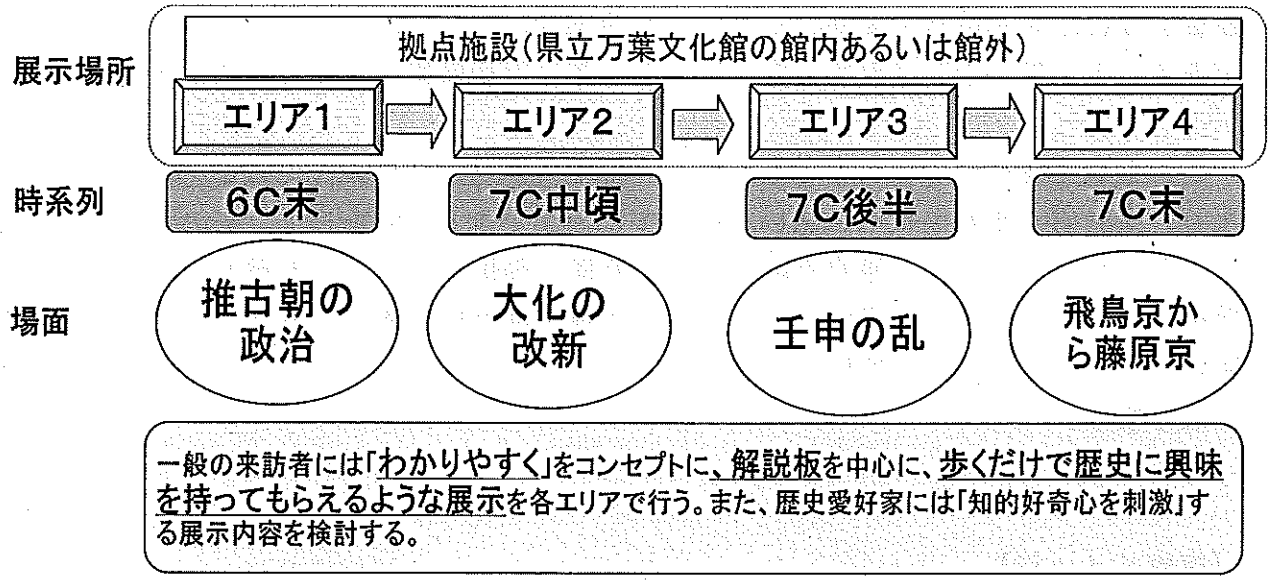
一般の来訪者の方が、歩くだけで明日香の歴史が体感できるよう、「明日香歴史回廊」という展示手法により、別紙１にある歴史テーマ等の展示を行います。

「明日香歴史回廊」とは、拠点施設である県立万葉文化館を中心として、飛鳥時代（６世紀末から７世紀末）における歴史のテーマ(国家の源流、仏教伝来、東アジア文化)、あるいは人物や事象等を展示するというものです。

具体的には、時系列によって回廊上に数カ所のエリア（ポイント）を設定し、それぞれのエリアにおいて歴史テーマに即した場面設定を行い、解説ボードの設置を中心に、一般の来訪者の方が、歴史に興味を持ってもらえるような展示を行うものです。
また、歴史愛好家の方の知的好奇心を刺激するような展示内容を検討します。

例えば、「国家の源流」という歴史テーマを「明日香歴史回廊」で展示する場合のイメージは、下表のとおりです。

例：「国家の源流」



（明日香歴史回廊のイメージ）

■遺跡の整備復原

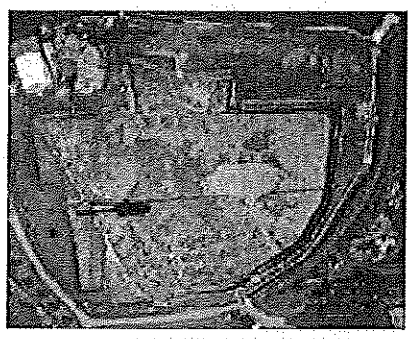
明日香の文化財の多くは地下に存在してます。しかも、発掘調査を行った遺跡の多くも調査後は埋め戻されてしまい、来訪者の目に触れることが少ないのが現状です。

来訪者に歴史を体感していただくためには、遺跡を目に見える形で復原することが必要です。

○飛鳥京跡苑池

【復原する意義】

伝飛鳥板蓋宮跡の西北に接する飛鳥京跡苑池遺構は、南北約２８０m、東西約１００mにわたる池と石造物、水路などによって構成され、斉明天皇期に造営された飛鳥時代を代表する苑池遺跡です。



（飛鳥京跡苑地南池の発掘）

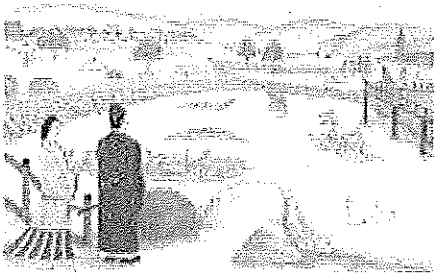
大正５年、この地から２個の石造物が掘りだされ、平成１１年には橿原考古学研究所により、石造物が発見された場所を中心にその出土状態の確認と遺構の性格の解明を目的として調査が行われました。

これら発掘調査により、飛鳥地域の苑池等の中で最も規模が大きくかつ複雑な構造であり、また中国・朝鮮半島からの影響を受けた飛鳥時代の苑池のデザインを典型的に示すものであることが明らかにされました。平成１５年には史跡指定を受けています。

この飛鳥京跡苑池を復原することは、一部ではあるが飛鳥時代の風景を再現することになり、来訪者が飛鳥時代への想いを巡らすことができる空間として、その意義は非常に大きいと言えます。また、飛鳥京跡苑池は、庭園の発展を知る上でも重要であることから史跡指定と同時に名勝にも指定されており、平城宮跡東院庭園や平城京左京三条二坊宮跡庭園といった奈良時代との庭園との比較により、その変容を目の当たりに見せることも可能となります。

【復原イメージ】

復原にあたっては、別紙４のとおり、発掘調査によりほぼ全容が解明されている南池について、遺構の上に現物と同様の材料を用いたレプリカを被せる形で復原整備するとともに、前述の大正時代に発掘された石造物や、発掘調査で見つかった噴水石造物のレプリカを展示していきます。



（飛鳥京の苑池イメージ図）

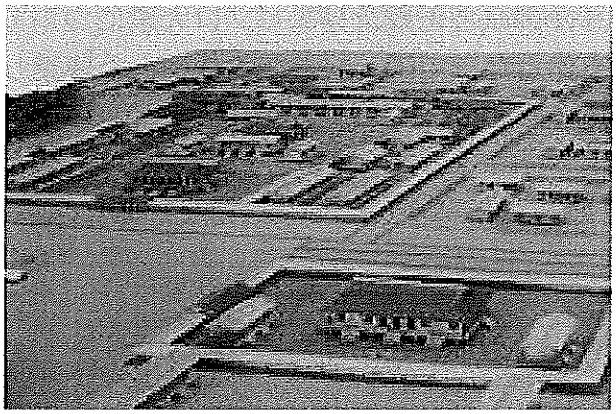
また、北池については発掘調査が一部にとどまっているため不明な部分が多く、その西側も飛鳥川の氾濫により遺構が失われているものと考えられるため、全容が明からにされていません。また、建物の存在も確認されておらず、今後の発掘調査が期待されるところですが、次期明日香村整備期間中(平成２２年度～３１年度)に一定の復原整備を進めるためには、まず南池の復原整備を行い、北池については、かつて池が広がっていたことをイメージできるような何らかの表示を行う方向で今後検討します。

今後、整備する区域内の植栽や整備後の維持管理、また池への水の供給や、飛鳥川の親水性護岸の整備など、検討すべき課題が数多くありますが、これらの復原整備に関しては、史跡指定地の公有化及び発掘調査と並行して、史跡・名勝としての保存と活用の方針を定めた「基本構想」を策定し、この基本構想を踏まえた復原整備の基本計画・実施計画を策定のうえ、奈良県として復原整備を行っていきます。

○飛鳥浄御原宮正殿・エビノコ大殿

【復原する意義】

伝飛鳥板蓋宮跡（飛鳥京跡）は、明日香村における宮跡の中でも最も枢要なものであり、舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、斉明天皇・天智天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇・持統天皇の飛鳥浄御原宮の３期にわたる宮殿遺構が重なって存在していると言われています。



（飛鳥の宮　復原模型）

（飛鳥浄御原宮正殿　復原ＣＧ）

このうち、７世紀後半の天武天皇と持統天皇の２代が営んだ宮である飛鳥浄御原宮の遺構は、昭和３４年より橿原考古学研究所を中心に発掘調査が行われてきましたが、宮殿の中枢区画である内郭の正殿や脇殿、内郭を囲む外郭の掘立柱塀などが検出され、具体的な姿が明らかになりつつあります。

昭和５４年には、東西７間、南北４間の規模を誇る南区画の正殿が確認されていますが、これは天武天皇の皇居と考えられ、南区画正殿は、四面庇で屋根は檜皮葺はもしくは板葺きで、床張りの掘立柱建物であったと推定されています。

また、エビノコ大殿は、昭和５２年の発掘調査で確認され、東西９間、南北５間と飛鳥宮の調査で見つかっている建物では最大級のものです。大殿の前面には「庭」と呼ばれる砂利敷きの空間が広がり儀式が行われていたものと推定されています。

（エビノコ大殿　復原ＣＧ）

これらを含めたエリアである伝飛鳥板蓋宮跡は昭和４７年に史跡指定され、一部環境整備が実施されていますが、それは想定される宮跡のごく一部であり、現状では、この地に立っても国家基盤が形成された地であることを体感し、回想することは相当困難であるのが現状です。

そこで、来訪者に明日香の歴史を体感してもらうことが出来るよう、歴史上意義深い飛鳥浄御原宮正殿及びエビノコ大殿についても飛鳥京跡苑池の整備復原と同じく、奈良県が主体となって国・村等関係機関とも連携しながら飛鳥時代の風景の再現を目指して検討を進めます。

■寺院・遺跡等における歴史展示

第Ⅱ章の「明日香における歴史展示の現状」で取り上げた坂田寺跡の解説板の他にも村内の現地解説板においては、「歴史」の解説（歴史上の位置づけ等）だけではなく、「歴史物」の解説（発掘成果としての伽藍配置等の表示）の面でも不十分なものが多く見受けられます。

また、現在複数の解説板が設置されている寺院や遺跡においても、各設置主体によって統一がとれていなったり、「歴史」の解説が不十分であるなどの課題が見られるところです。

例えば、石舞台古墳には、別紙５のとおり、大きく分けて４種類の解説板があります。国営飛鳥歴史公園事務所が設置した解説板は、「蘇我馬子の墓と推定される」という歴史面での記載とともに、地図や写真を使用し、また英語及びハングルでの表記もあるなど、充実した内容となっています。

（国営飛鳥歴史公園事務所設置の解説板）

一方、昭和５３年に奈良県教育委員会が設置した解説板は、発掘の歴史や古墳の形状説明にとどまっています。

【「歴史」の解説と「歴史物」の解説】

寺院や遺跡等での解説板について検討するとき、「歴史」の解説と「歴史物」の解説に分けて考える必要があります。

「歴史」の解説に関しては、第Ⅲ章で取り上げたテーマにふさわしい中心人物によるストーリーを展示する場としての寺院・遺跡という位置づけがあります。例えば、聖徳太子（厩戸皇子）の場合、「歴史」の総合展示施設としての県立万葉文化館においてパネル展示等によって概要説明を行いますが、別紙３のとおり、聖徳太子を現地展示するゆかりの場所として、小墾田宮跡や橘寺が想定できます。

もちろん人物展示だけでなく、明日香における歴史テーマ（「国家の源流」など）を、寺院や遺跡等の現地で解説するケースも考えられます。

次に、「歴史物」の解説についてですが、当然ながら明日香には多くの寺院・遺跡が存在します。それらの中で、上記「歴史」解説に関係する寺院や遺跡においては「歴史」解説とともに、必要に応じて「歴史物」解説を行っていきます。また、それ以外の歴史上重要な寺院・遺跡についても、奈良県と各関係者が調整を図りながら計画的に「歴史物」の解説を行っていきます。

第４次明日香村整備計画期間中においては、寺社や遺跡等において、人物を中心とする「歴史」の解説、及び「歴史物」の解説に取り組んでいきますが、「歴史」解説と「歴史物」解説を同時に行うことが可能な場合は、一体的に行っていきます。

なお、解説板が不十分な例とした坂田寺跡については、別紙６のとおり「歴史」及び「歴史物」の解説が一体となった解説板のサンプルを作成しています。

これら解説板については、スペースの問題はありますが、イラストや写真等を使いビジュアルに表示するとともに、中国や韓国とのゆかりについては、事実に即して記載することとします。また英語だけでなく中国語やハングルでの表記も行うことを基本とし、国内外の来訪者の方が、県立万葉文化館などの拠点施設だけでなく、現地を歩いても明日香の歴史がわかることを目指します。

■明日香における動線

明日香における歴史テーマ（「国家の源流」など）や、テーマに即した人物については、歴史の総合展示施設である県立万葉文化館で概要説明を行うとともに、ゆかりの場所においても「歴史」の解説を行っていきます。

例えば、「聖徳太子」という人物を取り上げた場合、県立万葉文化館と、ゆかりの場所と考えられる小墾田宮跡や橘寺を結ぶルートが『動線』となります。同様に他の人物やテーマによっても、明日香において新たな動線が設定されることになります。

また、「聖徳太子」の場合は、斑鳩町や桜井市などとも関連しており、全県的なスケールでの動線設定も行い、県立万葉文化館での「聖徳太子」の概要説明においては、“明日香におけるコース（動線）”と“奈良県全体のコース(動線)”を紹介することも考えられます。

明日香においては、すでにいろいろな切り口でルートが設定されていますが、歴史展示という視点から、新たな動線を構築することが必要です。新たな動線構築に伴って、村内各地をスムーズに移動していただけるよう、案内サインの整備を進めていくことも必要です。

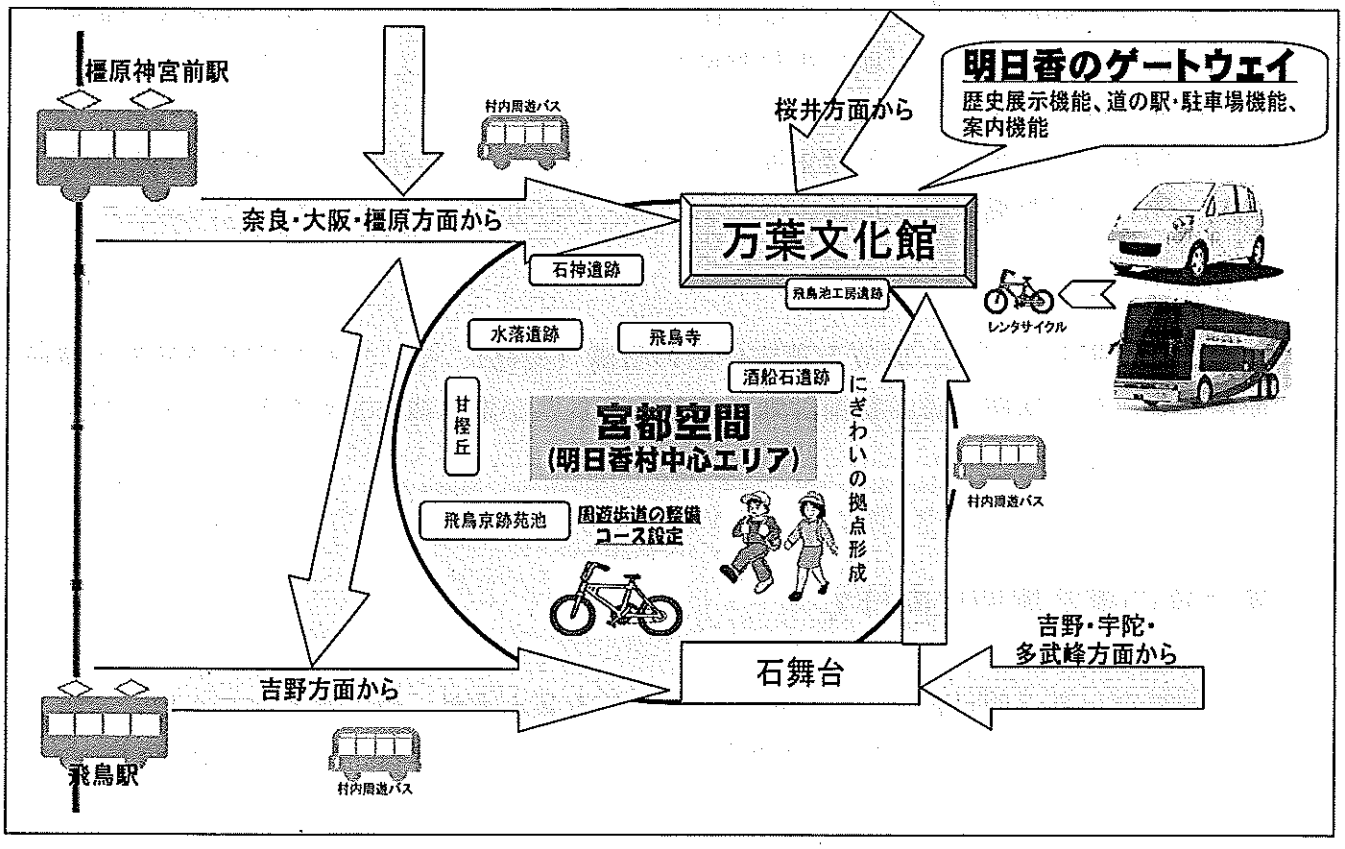
明日香全体の動線については、県立万葉文化館を明日香におけるゲートウェイと位置づけ、駐車場機能を強化するとともに、自動車やバスでの来訪者を道路案内等の情報提供により万葉文化館へ誘導します。また、電車での来訪者については、橿原神宮前駅あるいは飛鳥駅から村内周遊バス等により県立万葉文化館への誘導を図ります。

明日香への来訪者は、まず県立万葉文化館において明日香の歴史を学んでいただき、飛鳥水落遺跡、石神遺跡、酒船石遺跡、飛鳥池工房遺跡、飛鳥京跡苑池、甘樫丘、飛鳥寺な

どの宮都空間（明日香村中心エリア）は、自動車ではなく徒歩や自転車等で周遊することを基本とします。

このため、レンタサイクルや周遊歩道の整備とともに、前述の歴史テーマや人物に即したコース、史跡や寺院を周遊するコースなど、時間のある人、ない人それぞれが明日香を楽しんで周遊していただけるコースの設定及び案内機能強化・コースマップの充実等により、ハード・ソフト両面から明日香における周遊システム＝動線の確立を図ります。また、宮都空間内での電動カート等の導入についても、将来的な課題として検討していきます。なお、宮跡空間だけでなく、明日香全体の動線についても、今後検討を行っていきます。

明日香の動線イメージ図



Ⅴ　今後の展開

■明日香村整備基本方針・整備計画への反映

第Ⅰ章で記載したとおり、第４次明日香村整備計画の策定に向けて、昨年１０月から社会資本整備審議会が開催され、７月に出された答申において、歴史展示のあり方については、奈良県が中心となって検討することとされました。

これを受けて、今回、国土交通省や文化庁、また明日香村などの関係機関の協力を得て、奈良県において、「明日香における歴史展示等のあり方基本方針」を策定いたしました。

一方、明日香法第４条においては、国土交通大臣は、明日香村の生活環境及び産業基盤整備に関する基本方針＝「明日香村整備基本方針」を策定し、それを受けて奈良県が明日香村整備計画を策定すると規定されています。

このため、明日香における歴史展示等のあり方基本方針の成果は、明日香村整備基本方針及び明日香村整備計画に反映させていくことが必要です。

具体的には、

第Ⅳ章で取り上げた、県立万葉文化館の整備（改修）、そして飛鳥京跡苑池等の遺跡復原などを、第４次明日香村整備計画における奈良県が取り組む主要事業と位置づけていきます。

■今後の事業展開に向けて

今回策定した「明日香村の歴史展示等のあり方基本方針」は、あくまでも展示政策の方向性を示すものであり、実際の事業展開に向けては、さらに検討を重ねる必要があります。

展示する歴史の内容については、サンプル的にストーリーを作成しましたが、来年度以降、計画的に残りの人物についてもストーリーを作成する必要があります。その際、そのストーリーに沿って、具体的にどのような手法で、例えば、どの場所でどのような内容の展示を行うか等も考慮する必要があります。

展示手法まで考慮に入れたストーリー作成については、見せる仕掛けを得意とし、動線を意識した屋外展示に対応できる専門機関に委託することが考えられます。

明日香における歴史展示の対象者として、ひとつは一般の来訪者を想定していますが、ストーリー作成に関して、奈良県立高等学校の歴史教員で構成される「奈良県高等学校教科等研究会歴史部会（歴史学会）」の活用や、歴史に特化したカリキュラムを持つ高等学

校(法隆寺国際高校歴史文化科、西の京高校地域創生コース)の授業の一環として取り組むことも考えられます。

また、歴史愛好家に対する知的好奇心を刺激するような具体的な展示内容についても、検討することが必要です。

これらについては、専門家の方々の指導･監修を仰ぎながら、国・村など関係機関とも連携しつつ、県として検討を続けることとしています。

次に、拠点施設としての、県立万葉文化館の整備（改修）については、

歴史展示を行うスペースをどこに確保するか、テーマや人物を、パネル展示や映像、ＣＧ、レプリカ、フィギュアなどいかなる方法で展示するか、また総合案内機能をどの場所で具体的にどのように持たせるかなど、整理すべき課題が多く残されています。

奈良県全体における展示施設のあり方の検討と合わせ、今後関係部局において速やかに検討することが必要です。

また、遺跡復原については、公有化と並行して整備に向けた基本構想を策定し、それに基づいた基本計画・実施計画を策定していきます。

なお、奈良県庁内の組織体制として、平城遷都１３００年祭の終了後を目処に、上記で述べた明日香での検討課題だけでなく、奈良全体の今後の歴史展示を推進する組織の設置等も検討していきます。

■結び

「明日香の歴史展示等のあり方基本方針」は、明日香村整備計画を担当する奈良県地域振興部地域づくり支援課において取りまとめを行いました。

この策定にあたっては、明日香の歴史展示等のあり方検討会の構成メンバーである４名の有識者の方々をはじめ、オブザーバーである奈良文化財研究所都城発掘調査部、国営飛鳥公園事務所、明日香村、(財)飛鳥保存財団の皆さま方の多大なご協力をいただきました。

明日香は、東アジア文化との関係の中で、今日に繋がる国家基盤が形成された地です。この地で国家としての基本的枠組みが形づくられ、以来日本は連綿たる歴史を刻んできました。

日本人としての精神的な支柱の模索が続く時代に、日本のはじまりである明日香の歴史展示を進めることは、日本とはどういう国であるのか、日本人とは何者であるのかを自問する道程であるとともに、東アジアをはじめとする海外との新しいゆかりを築く道標でもあると考えており、非常に意義深いことであると自負しています。

奈良県としては、この「明日香における歴史展示のあり方基本方針」に基づき、今後とも国・村などの関係機関と連携･協力しながら、明日香の歴史展示を進めていきます。

（参考資料）

テーマと人物

別紙1

[ ]内は出身地

テーマ	キーワード	キーワードの概要
国家の源流	推古朝の政治 ＜黎明期＞	592年に推古天皇が即位。聖徳太子が摂政、蘇我馬子が大臣として政治の主導権を握る。太子と馬子の連立政権的状況の中で、遣隋使を派遣して積極的に大陸の文化や政治制度の導入をはかり、官僚制度の確立や歴史書の編纂などを行って、中央集権国家としての体裁を整えていった。
	大化の改新 (乙巳の変～天智朝) ＜準備期＞	聖徳太子・蘇我馬子・推古天皇の死後、蘇我蝦夷・入鹿の専横が目に余る様相を呈していた。皇室に主導権を取り戻し、天皇を中心とした国家体制の樹立を画策した中大兄皇子・中臣鎌足らは645年、飛鳥板蓋宮において、皇極天皇の目前で蘇我入鹿を殺害し、さらに蝦夷邸を攻撃して蝦夷を自殺に追い込む(乙巳の変)。年号を「大化」と定め、難波宮に遷って、孝徳天皇、皇太子・中大兄、内臣・中臣鎌足を中心に政治改革に取り組んだという(大化の改新)。のち、飛鳥に戻り、斉明期には盛んに土木工事と外征を行う。663年、朝鮮半島・白村江の戦いに敗れると、内政強化に方針転換し、668年、中大兄は近江大津宮で即位して天智天皇となり、近江令を制定したという。
	壬申の乱 ＜具現化への障害を払拭＞	671年、天智天皇が死去し、翌年、大友皇子の近江朝廷側と吉野に隠棲していた大海人皇子とが皇位をめぐって戦い、大海人側が勝利した。大友を支持した旧来の大豪族が一掃され、皇室の権威が突出した存在へと変化し、天皇が神格化されることとなった。
	飛鳥京の時代 (天武・持統朝) ＜具現期＞	壬申の乱に勝利した大海人皇子は672年、飛鳥浄御原宮で即位し天武天皇となった。皇族を重用して皇親政治を展開、「八色の姓」という新しい身分秩序を制定する。また、「飛鳥浄御原令」の制定や国史の編纂にも着手し、律令国家としての体裁を整えていく。続く持統天皇は、「飛鳥浄御原令」を施行し、「庚寅年籍」という戸籍をもとに班田制を実施するなど、律令政治を具体的に開始する。飛鳥が京(みやこ／首都)としての役割を担い始める時代だと言える。
	藤原京の時代 ＜完成期＞	持統天皇は、唐の都・長安の都城制にならい、畝傍・耳成・天香久山の大和三山に囲まれた地に、藤原京を造営。694年に遷都し、701年には「大宝律令」が制定される。中国を手本にした律令国家体制づくりは、藤原京造営をもって完成期を迎えた。
仏教の伝来と興隆	カミの崇拝	カミ(自然や先祖)の崇拝による祈願祈念とその結果が政や生活の指針となっていた。
	崇仏論争	552年、百済聖明王からの「仏教公伝」を受けて、仏教信仰推進派の蘇我稲目と仏教排除派の物部尾輿が対立。敏達天皇・用明天皇の相次ぐ病死で排仏派の物部氏が優勢となったが、次期天皇擁立をめぐる政争から蘇我馬子・厩戸皇子が物部守屋を討ち、崇仏派の蘇我氏が主導権を握るようになった。
	仏教興隆策	592年に推古天皇が即位。聖徳太子が摂政、蘇我馬子が大臣として政治の主導権を握る。飛鳥寺や法隆寺など各地に寺院を建立したり、朝鮮半島から僧を招いたり、役人に仏教信仰を奨励したり、と仏教興隆を国策として推進していった。
	古墳の終末	646年の薄葬令や仏教伝来に伴う死生観変化、寺院建設の流行などにより、権力の象徴であった古墳築造が衰退していった。
東アジア文化の受容と変容	陰陽五行と古代の思想	古代からの相宅や相墓といった占いの技術が陰陽五行説に基づきつつ総合されて成立した。天文学、易学、暦学、地理学なども広く包括され、高松塚古墳やキトラ古墳の「四神図」や「天文図」、飛鳥池工房遺跡から大量に出土した「富本銭」に見られる「七曜」などもこれに関連したものと思われる。
	大陸の先進技術	遣隋使・遣唐使の派遣や朝鮮半島情勢の変化による渡来人の大量移住などによって、文化や思想とともに、建築、造園、木・石・金属などへの彫刻、陶芸、鋳造など新しい技術が伝わったと考えられる。 日本古来の様式は、これら技術の影響により、変容を受けたり、日本独自の発展を遂げることとなる。
	漢字と万葉仮名	漢字で日本語を表記した例は、5c後半の稲荷山古墳出土の鉄剣銘や6c初の隅田八幡神社人物画像鏡銘などに見られ、渡来系氏族が文筆の仕事に従事していたと考えられている。官僚制度を整えていく段階で、漢字の教養が上層階級に広がり、日本語を漢字を利用して表記する「万葉仮名」へと発展していったと考えられる。また、それに付随して紙や墨の製法も本格的に伝来した。

語り部		中心人物	周辺人物
通史	テーマ		
太安万侶	藤原不比等	推古天皇	聖徳太子 裴世清[隋] 小野妹子
		天智天皇 (中大兄皇子)	中臣鎌足 蘇我入鹿 有間皇子
		天武天皇 (大海人皇子)	大友皇子 大伴吹負 大分稚臣 [大分県]
		持統天皇	高市皇子 草壁皇子 大津皇子
		藤原 不比等	持統天皇 文武天皇 柿本人麻呂
	道昭	蘇我稲目	聖明王[百済] 物部尾輿 三輪 逆
		聖徳太子 (厩戸皇子)	推古天皇 蘇我馬子 玄奘[唐]
	南淵請安	南淵請安	皇極天皇 高向玄理 僧旻[百済]
		観勒[百済]	聖徳太子 恵慈[高句麗]
		柿本 人麻呂	曇徴[高句麗] 稗田阿礼 太 安万侶

(2)飛鳥時代の関係人物

※現時点では、キーワードに対応するストーリーにその人物が必ずしも登場してはいない。

人物名	キーワード	解説
推古天皇	仏教興隆策 推古朝の政治	第33代天皇(在位593年1月 - 628年4月)。敏達天皇妃。崇峻天皇が蘇我馬子に暗殺(592)されたあと、豊浦宮で即位した。わが国最初の女帝。602年小墾田宮を造営してここに移転、亡くなるまでを小墾田宮で過ごした。
蘇我馬子	カミの崇拝、崇仏論争 推古朝の政治	稲目の子。渡来系の司馬氏と協力して崇仏運動を推進。 大臣(おおおみ)として、推古朝期には聖徳太子との連立政権的役割を果たした。
聖徳太子 (厩戸皇子)	カミの崇拝、崇仏論争	用明天皇の子。橘離宮(のち橘寺)で生まれる。蘇我馬子と物部守屋の戦いの際、馬子側に参戦し、勝利に貢献したという。
	仏教興隆策	593年、推古天皇の摂政に就任。604年「十七条憲法」を作成し、役人に仏教信仰を奨励する。615年頃、仏教経典の注釈書である「三経義疏」を著す。
	推古朝の政治	推古天皇の摂政として中央集権体制樹立に向けての諸施策を行う。冠位十二階制、十七条憲法を制定し官僚機構を整えた。遣隋使の派遣の際、小野妹子に持たせた国書には対等外交の姿勢が見られる。また、中国の王朝にならい、「天皇記」「国記」など歴史書の編纂も行ったという。
	漢字と万葉仮名	「十七条憲法」の中で仏教信仰を奨励したのは、経典研究を通じて役人階層に「文字文化」を定着させようという意図があったとの説がある。漢字の音を借りて、日本語を表記する「万葉仮名」の発展につながったと考えられる。
裴世清 [隋]	推古朝の政治	隋の煬帝が、第2回遣隋使の答礼使として608年に倭国へ派遣した。6月15日難波津に泊まった。翌年には倭国返書を持ち帰国。この際、小野妹子、高向玄理、南淵請安、旻が再度遣唐された。
小野妹子	推古朝の政治	推古15年(607)に隋に派遣される。「日出処の天子…」と書いた国書を煬帝に提示し煬帝の怒りをかう。しかし翌年、返使・裴世清が来日。
天智天皇 (中大兄皇子)	大化の改新	舒明天皇・皇極天皇の子。皇極4年(645)、中臣鎌足らと謀り、クーデターを起こして蘇我入鹿を殺害し、叔父・孝徳天皇を即位させ、自身は皇太子となった。そして大化という元号を制定し、様々な改革を行った。 661年、百済救援活動中に斉明天皇が崩御したが、その後、長い間皇位に即かず称制を行う。663年、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗を喫した後、667年近江大津へ遷都して、翌年即位した(天智天皇)。第38代天皇(661年8月 - 称制、在位668年2月 - 672年1月)。 白村江の戦以後は、国土防衛の政策の一環として水城や烽火・防人を設置した。又、冠位もそれまでの十九階から二十六階に制度改革などを行なっている。また、670年には我が国最古の全国的な戸籍「庚午年籍」を作成させている。
中臣(藤原)鎌足	大化の改新	645年、中大兄皇子・石川麻呂らと協力して飛鳥板蓋宮にて、当時政権を握っていた蘇我入鹿を暗殺、入鹿の父の蘇我蝦夷を自殺に追いやった(乙巳の変)。この功績から、内臣(うちつおみ)に任じられ、軍事指揮権を握った。 臨終に際して天智天皇から「大織冠」とともに「藤原」姓を賜る。つまり、生きていたころの彼を指す場合は「中臣鎌足」を用い、「藤原氏の祖」として彼を指す場合には「藤原鎌足」を用いる。
孝徳天皇	大化の改新	第36代天皇(在位645年7月 - 654年11月)。皇極天皇の同母弟。645年の乙巳の変の後、推されて天皇となる。孝徳天皇は難波長柄豊碕宮を造営し、そこを都と定めた。が、白雉4年(653)に、皇太子(中大兄皇子)は天皇に飛鳥に遷ることを求めた。天皇がこれを退けると、皇太子は皇祖母尊(皇極)と間人皇后、皇弟(大海人皇子)を連れて飛鳥に赴く。臣下の大半が皇太子に随って去ったので、天皇は気を落とし、翌年病気になって亡くなった。
有間皇子	大化の改新	孝徳天皇の皇子。658年11月9日、中大兄皇子らにより謀反計画が発覚。尋問に対して、「全ては天と蘇我赤兄だけが知っている。私は何も知らぬ」と答えたが、11日に藤白坂で絞首刑に処せられた。
蘇我蝦夷	大化の改新	馬子の子。推古天皇没後、舒明天皇擁立に尽力。父・馬子の死後、蘇我氏に対する内外の風当たりが強くなる中で、皇族や諸豪族との融和を重視して、蘇我氏との血縁関係のない舒明天皇を即位させたという説もある。皇極4年(645)に天皇の御前で入鹿が殺されると、一時は蝦夷のもとに与する者が集まったが、翌日、入鹿の屍を前に蝦夷は邸宅に火をかけ「天皇記」・「国記」もろとも自殺した。
蘇我入鹿	大化の改新	蝦夷の子。父の大臣・蘇我蝦夷の晩年の皇極元年(642)、皇極天皇の即位に伴い、父に代わって国政を掌理する。この頃、皇室の周辺に国政を天皇中心に改革しようとする気運が強まったとされ、入鹿はこのような動きを押さえ蘇我氏の縁の強い古人大兄皇子を天皇につけようと図る。そのために邪魔になる聖徳太子の王子、山背大兄王ら上宮王家の人々を自殺に追い込んだ。しかし皇極4年(645)、古人大兄皇子の異母弟で、皇位継承のライバルだった中大兄皇子・中臣鎌足らのいわゆる乙巳の変のクーデターによって、飛鳥板蓋宮の大極殿において皇極天皇の御前で暗殺された。
天武天皇 (大海人皇子)	壬申の乱	660年代後半、都を近江宮へ移していた天智天皇は、同母弟の大海人皇子を皇太子(皇太弟)に立てていたが、天智10年(671)10月、天智の皇子である大友皇子を太政大臣につけて後継とする意思をみせ始めた。天智天皇が病に臥せると、大海人皇子は大友皇子を皇太子として推挙し、出家を申し出て吉野宮に下った。天智天皇が没すると、672年6月、大海人皇子は吉野を出て美濃に移り、7月近江朝廷を攻めて大友皇子を自殺に追い込み、同時に近江朝廷側に荷担した旧来の大豪族勢力を一掃した。
	飛鳥京の時代	第40代天皇(在位673年3月 - 686年10月)。即位後は「飛鳥浄御原令」の制定を命じ律令国家の確立を目指す。天武13年(684)、「八色の姓」を制定して朝廷の身分秩序を確立し、新冠位制を施行した。また、天武天皇は皇親政治を徹底するためにその治世中、大臣を1人も置かなかった。
大友皇子	壬申の乱	天智天皇は実弟・大海人皇子を皇太子に任じていたが、我が子可愛さの余り、弟との約束を破って大友皇子を皇太子と定めたと記されている。しかし漢詩集『懐風藻』や『万葉集』には「父・天智が大友皇子を立太子(正式な皇太子と定めること)していた」とあり、これを支持する学説もある。 壬申の乱によりその治世は短く、明治3年(1870)に弘文天皇の諡号を贈られるまで歴代天皇として数えられなかった。現在では、正式には即位していなかったものの倭姫王(天智天皇の皇后)を立てて、皇太子として称制していたのではないかとの説もある。
大伴吹負 (おおとものふけい)	壬申の乱	壬申の乱で大海人皇子側に立って兵を挙げ、飛鳥の倭京の本営(飛鳥寺の西の槻のもと)に集結中の敵軍を乗っ取って、倭(大和)の方面の将軍になった。及楽山で敗れたが、葦池と中つ道で連勝し、最終的に大和を制圧して難波に進出した。
大分稚臣 (おおきだのわかおみ)	壬申の乱	大分氏は豊後国大分郡の豪族。大津皇子の舎人。壬申の乱で大海人皇子(天武天皇)の軍に加わり、7月22日の瀬田の戦いで、朝廷軍が瀬田の大橋に仕掛けた罠を見破り先頭に立って橋を突破し、味方を勝利に導いた。
村国男依 (むらくにのおより)	壬申の乱	村国氏は美濃国各務郡の豪族。壬申の乱で大海人皇子に属して戦い、近江方面の諸将の筆頭として連戦連勝し、最大の功を立てた。
持統天皇 (鵜野讃良皇女)	飛鳥京の時代	第41代天皇(686年10月 -称制、在位690年2月 - 697年8月文武に譲位)。天智天皇の娘、天武天皇の妃となり、草壁皇子をもうける。天武の後継として草壁を推していたが、草壁は27歳で早世。草壁の子・軽皇子(のちの文武天皇)の成長を待つために即位したと思われる。 689年、「飛鳥浄御原令」を施行。翌年「庚寅年籍」を作成し、692年にはその戸籍に基づいて口分田の班給が畿内で開始された。
	藤原京の時代	694年には、かねてから造営していた藤原宮に遷都した。697年、草壁皇子の遺児、軽皇子を15歳で立太子させた。同年譲位し、自らは天皇を後見した。初めて、譲位後に太上天皇を名乗った。
高市皇子	飛鳥京の時代	天武天皇の皇子(長男)。672年の壬申の乱では若年(18才)であったが大海人皇子軍の全権を委ねられ、乱に勝利した。686年に持統天皇が即位すると、太政大臣になり、以後は天皇・皇太子を除く皇族・臣下の最高位になり、持統政権を支えた。長男は長屋王。
草壁皇子	飛鳥京の時代	天武天皇と皇后鵜野讃良皇女(後の持統天皇)の子。妃は阿陪(あへ)皇女(後の元明天皇)。文武天皇の父。壬申の乱が勃発すると、大津皇子ら、他の兄弟達と共に両親に同伴する。天武8年(679)には吉野の盟約で事実上の後継者となり、天武10年2月に立太子。しかし皇位に就くことなく持統3年(689)4月13日薨去。
大津皇子	飛鳥京の時代	天武天皇皇子。母は天智天皇皇女の大田皇女(鵜野讃良皇女の実姉)。同母姉に大来皇女。皇太子ともなり得た天皇になる資格と素質を備えながらも、皇太子・草壁皇子への謀反の疑いから死を賜った。
藤原不比等	藤原京の時代	藤原鎌足の次男。文武2年(698)には、不比等の子孫のみが藤原姓を名乗り、太政官の官職に就くことができるとされた。不比等以外の鎌足の子は、鎌足の元の姓である中臣姓とされ、神祇官として祭祀のみを担当することと明確に分けられた。このため、不比等が藤原氏の実質的な家祖と解することもできる。 刑部親王・栗田真人・下毛野古麻呂らとともに大宝律令の編纂作業にあたり、大宝元年(701)8月に完成した。
文武天皇	藤原京の時代	第42代天皇(在位697年9月 - 707年7月)。父草壁が689年に亡くなり、696年には伯父にあたる高市皇子も薨じたため、697年2月立太子。同年8月、祖母・持統天皇に譲位され即位した。当時15歳という若さであったため、持統が上皇として後見役についた。大宝元年(701)に「大宝律令」が完成し、翌年公布している。また混乱していた冠位制を改め、新たに官位制を設けた。
元明天皇	藤原京の時代	第43代天皇・女帝(在位707年8月-715年10月)。夫・草壁皇子。息子・文武天皇。707年4月に孫・首(おびと)皇子(後の聖武天皇)の中継ぎとして初めて皇后を経ないで即位した。708年に武蔵国秩父(黒谷)より和銅が献じられた。和銅に改元、和同開珎を鋳造。大宝律令(701年)の整備・運用していく時代で実務に長けていた藤原不比等を重用。710年、藤原京より平城京に遷都した。

刑部(おさかべ)親王	藤原京の時代	天武天皇の皇子。「忍壁皇子」とも表記される。高松塚古墳の被葬者との説もある。 藤原不比等・葦田真人・下毛野古麻呂らとともに大宝律令の編纂作業にあたり、大宝元年(701)8月に完成した。
柿本人麻呂	藤原京の時代 漢字と万葉仮名	飛鳥時代の歌人。三十六歌仙の一人。後世、山部赤人とともに歌聖と呼ばれ、称えられている。 人麻呂の歌は、讃歌と挽歌、そして恋歌に特徴がある。賛歌・挽歌については、「大君は 神にしませば」「神ながら 神さびせすと」「高照らす 日の皇子」のような天皇即神の表現などをもって高らかに賛美、事績を表現する。 『愛国百人一首』(昭和17年発表)には「大君は神にしませば天雲の雷の上に廬(いほり)せるかも 」という天皇を称えた歌が採られている。
蘇我稲目	カミの崇拝、崇仏論争	仏教公伝(538年)当時の大臣。仏教崇拝推進派(崇仏派)の中心人物。
聖明王 [百済]	カミ崇拝、崇仏論争	聖王(せいおう、生年不詳－554年)百済の第26代の王(在位:523年－554年)。新羅への対抗のために珠更に倭(ヤマト王権)との連携を図った。 聖王の時代に倭国に仏教を公伝。その記事は、使者を送り、金銅の仏像一体、幡、経典などを伝えた(『日本書紀』538年宣化天皇)。
欽明天皇	カミの崇拝、崇仏論争	第29代天皇(在位540年1月－571年4月)。欽明13年(552)に百済聖明王から仏像と経典が伝えられたという。 『上宮聖徳法王帝説』や『元興寺伽藍縁起』には「戊午年」に伝来とあり、仏教公伝は538年とするのが有力説となっている。
敏達天皇	カミの崇拝、崇仏論争	第30代天皇(在位572年4月－585年9月)。 当初崇仏派を支持していたが、疫病がはやり排仏へと方針を転換。蘇我馬子と物部守屋が対立している中で病没。
用明天皇	カミの崇拝、崇仏論争	第31代天皇(在位585年10月－587年5月)。敏達天皇の異母弟。聖徳太子の父。敏達のあと天皇となるが、2年後に病没。
物部尾輿	カミの崇拝、崇仏論争	仏教公伝(538年)当時の大連。仏教受容反対派(排仏派)の中心人物。
物部守屋	カミの崇拝、崇仏論争	尾輿の子。蘇我氏の崇仏運動に反対し、疫病流行を理由に排仏を主張。蘇我馬子との争いに敗れ、滅ぼされる。
司馬達等	カミの崇拝、崇仏論争	達等自身は仏教創成期のころ蘇我馬子に協力して仏教興隆に尽力している。その子の鳩は敏達13年(584)、年11で出家して善信尼と称した。我が国初の尼僧である。同時に出家した渡来系氏族の娘二人と一緒に、4年後には百済に戒律を学ぶため二年間留学している。
鞍作鳥(止利仏師)	仏教興隆策	司馬達等の孫。飛鳥寺の釈迦如来像(飛鳥大仏)や法隆寺釈迦三尊像を造立。 推古13年(605)に丈六の仏像を造立。翌年、飛鳥寺金堂に設置しようとしたが、金堂の入口よりも背が高く入らないことが発覚。しかし、彼は入口を壊すことなく仏像を堂内に安置したとの逸話が残っている。
三輪逆 (みわのさかう)	崇仏論争	飛鳥時代の豪族。敏達天皇の寵臣。逆は物部守屋、中臣磐余と共に廃仏派。しかし、敏達天皇崩御後の殯宮で、穴穂部皇子は炊屋姫(敏達天皇の皇后)を犯さんと押し入ろうとした時、逆は兵衛を集めて宮門を閉じて侵入を拒んだだため、穴穂部皇子と物部守屋に誅殺された。
道昭	古墳の終末	飛鳥時代(629年－700年)の僧。653年遣唐使の一員として入唐し、玄奘に師事して法相教学を学ぶ。法興寺(別名飛鳥寺・元興寺)の一隅に禅院を建立して住み、日本で初めて火葬に付された。弟子に行基。
玄奘三蔵 [唐]	古墳の終末	唐の僧(602年－664年)。629年国禁を犯して出国し、天竺(現在のインド)ナーランダ寺で戒賢より唯識を学び、各地の仏跡を巡拝した後、天山南路を経て帰国。膨大な経典を長安に持ち帰った。遣唐使の一員として入唐した道昭がその教えを受けた。
定恵(藤原真人)	古墳の終末	藤原鎌足の長男。不比等の兄。非常に優秀で僧として11才で遣唐使と共に長安へ渡り、神泰の弟子となる。神泰は当時、三蔵法師が持ち帰った教典の翻訳作業中で、仏教の最新の成果を学んだ。12年後帰国したが、3ヶ月後の665年12月大原(明日香村小原)で亡くなった。
行基	古墳の終末	奈良時代の僧(668年－749年)。師は道昭。百済系渡来氏族の末裔。法相宗などの教学を学び、集団を形成して貧民救済・治水・架橋などの社会事業活動。弾圧を受けたが、その後、東大寺大仏造立にも関わり、聖武天皇の命により東大寺大仏開眼供養の導師を勤めた。
南淵請安	陰陽五行と古代思想	推古16年(608)、遣隋使小野妹子に従い高向玄理、僧旻ら8人の留学生、留学僧の一人として隋へ留学する。32年間、隋の滅亡(618年)から唐の建国の過程を見聞して、舒明12年(640)に高向玄理とともに帰国。隋・唐の進んだ学問知識を日本に伝えた。 中大兄皇子と中臣鎌子は請安の塾に通う道すがら蘇我氏打倒の計画を練ったと伝えられる。請安が伝えた知識が大化の改新に与えた影響は大きいが、彼自身は新政府に加わっておらず、これ以前に死去したものと思われる。 明日香村稲渕に「南淵請安先生の墓」がある。「稲渕」の地名は「南淵」が訛ったものと思われる。
皇極天皇 (斉明天皇)	陰陽五行と古代思想	第35代天皇(在位642年2月－645年7月)。舒明天皇の妃。舒明天皇の死後に即位。645年に子の中大兄皇子が蘇我蝦夷・入鹿親子を滅ぼす(乙巳の変・大化の改新)と、皇極天皇は同母弟の軽皇子(後の孝徳天皇)に皇位を譲った(史上初の譲位)。 第37代天皇(在位655年2月－661年8月)。孝徳天皇の死後、655年に再び皇位に就いた(史上初の重祚)。政治の実権は皇太子の中大兄皇子が執った。しばしば工事を起こすことを好んだため、労役の重さを見た人々が批判したという。660年に百済が唐と新羅によって滅ぼされると、百済を援けるため、難波に遷って武器と船舶を作らせ、更に瀬戸内海を西に渡り、筑紫の朝倉宮に居て戦争に備えた。しかし翌年、遠征の軍が発する前に亡くなった。 「亀形石造物」は斉明期に作られた。当時、留学から帰国した僧旻(みん)が伝えた易学が流行していた可能性が高く、それに関連した何らかの祭祀に使用したと想像される。
高向玄理	陰陽五行と古代思想	高向氏は魏の曹操の末裔を称する渡来人の子孫。608年、遣隋使小野妹子に従い留学生として隋へ留学し、640年に南淵請安とともに帰国する。645年の大化の改新後、僧の旻とともに新政府の国博士に任じられる。
旻(みん)(日文) [百済]	陰陽五行と古代思想	飛鳥時代の学僧で百済からの渡来人。本名は日文。推古16年(608)遣隋使小野妹子に従い高向玄理・南淵請安らとともに隋へ渡り、24年間隋で仏教のほか易学を学び、舒明4年(632)8月日本に帰国。その後、蘇我入鹿・藤原鎌足らに「周易」を講じた。 大化の改新のあと、大化元年(645)に高向玄理とともに国博士に任じられ、大化5年(649)高向玄理と八省百官の制を立案している。翌大化6年に白戸国司から白い雉が献上されると、その祥瑞を説明して「白雉」と改元された。
観勒 [百済]	陰陽五行と古代思想 大陸の先進技術	7世紀初頭の百済の僧侶。日本へ602年に来航する。三論宗の法匠であり、成実宗にも通じていたという。推古10年(602年)に渡来、天文、暦本、陰陽道を伝える。暦本は604年に聖徳太子によって採用された(ただし正式な暦法の採用は持統朝である)
恵慈(慧慈) [高句麗]	仏教興隆策 大陸の先進技術	推古3年(595)、高句麗から渡来した僧。飛鳥寺に招かれる。聖徳太子の仏教の師。
曇徴(どんちょう) [高句麗]	漢字と万葉仮名	7世紀に高句麗から渡来した僧。推古天皇18年(610)高句麗王から貢上されて僧法定(ほうじょう)とともに日本へ来朝した。五経に詳しく、彩色(現在の絵具)や紙墨を作り、また碾磑(みずうす＝水力を利用した臼。紙の原料となる麻クズの繊維を細かく砕くために用いたと考えられている。)も造ったという。
稗田阿礼	漢字と万葉仮名	稗田阿礼という人物については、「古事記の編纂者の一人」という以外にはほとんど何もわかっていない。同時代に編まれた『日本書紀』にもこの時代の事を記した『続日本紀』にも名前は出てこない。『古事記』の序文によれば、天武天皇に舎人として仕えていた。一度目や耳にしたことは決して忘れなかったので、その記憶力の良さを見込まれて『帝紀』『旧辞』等の誦習を命ぜられた。そのとき28歳であったと記されている。元明天皇の代、詔により太安万侶が阿礼の誦する所を筆録し、『古事記』を編んだ。
太安万侶	通史 漢字と万葉仮名	太 安万侶(生年不詳－723年8月15日)は、奈良時代の文官。従四位下・民部卿。 711年(和銅4年)、元明天皇に稗田阿礼の誦習する『帝紀』『旧辞』を筆録して史書編纂を命じられ、翌712年(和銅5年)『古事記』献上。 1979年(昭和54年)1月23日奈良市此瀬町の茶畑から太安万侶の墓が発見。火葬された骨や真珠が納められた木櫃と共に墓誌が出土。

別紙２

国家の源流

【概要】
4世紀頃、大和（奈良県）地域に大和王権が成立しました。この政権は、大王（オオキミ）を中心として有力豪族で構成されていました。九州北部から関東までを支配し、国内だけでなく中国・朝鮮半島とも積極に交渉を持ちました。この後、渡来人として中国・朝鮮の人々が一族で日本へ移住する状況も生まれました。
しかし、6世紀末に中国では隋・唐が成立し、朝鮮でも新羅が勢力を持つと、新しい政治制度による強大な軍事力に日本は大きな危機感を持つようになりました。
当時の人々は、この状況に対処するため、新しい政治や文化を積極的に中国や朝鮮半島から取り入れる努力をしました。
この結果、飛鳥の地で律令政治とよばれる体制による中央集権国家、今の日本という国家の源流ともいえる体制が形成され、藤原京、平城京へと続いていくことになりました。

【語り部】藤原不比等の紹介
藤原不比等は鎌足の子で、後に大宝律令制定では重責を担い、天武天皇が目指し、持統天皇が引き継いだ中央集権制の成立の中心人物ですが、謎の多い人物です。
壬申の乱の前に鎌足は亡くなり、乱の当時不比等は幼く近江朝側であっても刑罰には問われなかったようです。持統朝時代、31才の時、判事に任ぜられ、正史に登場しました。
聖武朝にかけて各天皇のもと、藤原京、平城京遷都や律令国家確立に向け大事業を次々と行いました。人身位を極め、藤原氏栄華の基礎を固めました。

語ってみよう「国家の源流」。歴史は今につながっている。 By 不比等

3，4世紀の日本
倭国と呼ばれた当時の日本では、前方後円墳と呼ばれる大型の古墳を造った強大な大和王権が、九州北部から関東までを支配していました。

不比等の独り言
大王の時代

関連寺院、遺跡等

東アジアの中の日本
朝鮮半島では伽耶地方の小国が倭国と連携して新羅や百済に対抗するなど、当時の日本は朝鮮半島と深い結びつきがありました。

不比等の独り言
憧れの東アジア

関連寺院、遺跡等

推古朝の政治
592年に推古天皇が即位。翌年、聖徳太子が摂政、蘇我馬子が大臣として政治の主導権を握りました。太子と馬子の連立政権的状況の中で、遣隋使を派遣して積極的に大陸の文化や政治制度の導入をはかり、官僚制度の確立や歴史書の編纂などを行って、中央集権国家としての体裁を整えていきました。

不比等の独り言

初の女帝

推古天皇のストーリー
不比等と対談

関連寺院、遺跡等

大化の改新
蘇我蝦夷・入鹿の専横が目に余る様相を呈する中、天皇を中心とした国家体制の樹立を画策した中大兄皇子・中臣鎌足らは645年、飛鳥板蓋宮において時の権力者蘇我入鹿を殺害し、さらに父の蝦夷邸を攻撃して蝦夷を自殺に追い込みました(乙巳の変)。年号を「大化」(我が国最初の年号)と定め、難波宮に遷って政治改革に取り組みました(大化の改新)。のち、飛鳥に戻り、斉明期には盛んに土木工事と外征を行いました。[illegible]島・白村江で唐・新羅連合軍と戦いました。

不比等の独り言

父鎌足について

天智天皇のストーリー
不比等と対談

関連寺院、遺跡等

壬申の乱
671年、天智天皇が死去し、翌年、大友皇子の近江朝廷側と吉野に隠棲していた大海人皇子とが皇位をめぐって戦い、大海人皇子側が勝利しました。大友皇子を支持した旧来の大豪族が一掃され、皇室の権威が突出した存在へと変化し、天皇が神格化されることとなりました。

不比等の独り言

寂しく怖かった

天武天皇のストーリー
不比等と対談

関連寺院、遺跡等

飛鳥京の時代
壬申の乱に勝利した大海人皇子は672年、飛鳥浄御原宮で即位し天武天皇となりました。皇親政治を展開、「八色の姓」を制定し、「飛鳥浄御原令」の制定や国史の編纂にも着手、律令国家としての体裁を整えていきました。続く持統天皇は、「飛鳥浄御原令」を施行し、「庚寅年籍」「班田制」を実施し、律令政治を具体的に開始しました。飛鳥が京(みやこ／首都)としての役割を担い始める時代だと言えます。

不比等の独り言

輝く青春時代

持統天皇のストーリー
不比等と対談

関連寺院、遺跡等

藤原京の時代
持統天皇は、唐の都・長安の都城制にならい、畝傍・耳成・天香久山の大和三山に囲まれた地に、藤原京を造営。694年に遷都し、701年には「大宝律令」が制定されました。中国を手本にした律令国家体制づくりは、藤原京造営をもって完成期を迎えました。

不比等の独り言

都造りの苦労

関連寺院、遺跡等

平城京
新しい都として平城京がつくられ、飛鳥・藤原から多くの寺院が移されました。地方は国・郡に分けられるなど統一国家の仕組みが整えられました。

不比等の独り言
人生に悔い無し

仏教の伝来と興隆

【概要】
日本では古来、太陽や山などの自然を神々として信じ、素朴な死後の世界を思い描いていましたが、6世紀半ば、仏像や教典が百済から朝廷に送られ、その体系や壮大な仏教の教えに人々は圧倒されました。
仏教を信じるか信じないか、日本古来の神々を信じる人々と新しい仏教を信じる人々の間で、激しい戦いが繰り広げられました。
やがて、仏教を信じる聖徳太子や蘇我馬子が主導権を握ると飛鳥地方を中心に、仏教文化が栄えました。
以後、仏教は日本の政治や文化に大きく影響を与えることとなりました。

【語り部】道昭の紹介
653年、遣唐使の一員として中国へ渡り、玄奘(三蔵法師)の弟子になりました。
660年頃、帰朝。この時多くの経典類を持ち帰りました。法興寺(別名飛鳥寺・元興寺)の一隅に禅院を建立して住みました。天武天皇からも信頼されており、晩年は全国を遊行し、各地で土木事業を行いました。
700年に没し遺命により、日本で初めて火葬に付されました。弟子に行基がいます。

語ってみよう「仏教の伝来と興隆」。仏教は、ここに花開いた。 By 道昭

カミの崇拝
カミ(自然や先祖)の崇拝による祈願祈念とその結果が政や生活の指針となっていました。

道昭の独り言
現在に生きる神々

関連寺院、遺跡等

崇仏論争
552年、百済聖明王からの「仏教公伝」を受けて、仏教信仰推進派の蘇我稲目と仏教排除派の物部尾輿が対立しました。敏達天皇・用明天皇の相次ぐ病死で排仏派の物部氏が優勢となりましたが、次期天皇擁立をめぐる政争から蘇我馬子・厩戸皇子が物部守屋を討ち、崇仏派の蘇我氏が主導権を握るようになりました。

道昭の独り言
尼への道

蘇我稲目のストーリー
道昭と対談

関連寺院、遺跡等

仏教興隆策
592年に推古天皇が即位。聖徳太子が摂政、蘇我馬子が大臣として政治の主導権を握りました。飛鳥寺や法隆寺など各地に寺院を建立したり、朝鮮半島から僧を招いたり、役人に仏教信仰を奨励したり、と仏教興隆を国策として推進していきました。

道昭の独り言
立ち並ぶ五重塔

聖徳太子のストーリー
道昭と対談

関連寺院、遺跡等

古墳の終末
646年の薄葬令や仏教伝来に伴う死生観変化、寺院建設の流行などにより、権力の象徴であった古墳築造が衰退していきました。

道昭の独り言
火葬の決意

関連寺院、遺跡等

天智天皇(中大兄皇子)

写真又はカット割り

【人物概要】
舒明天皇の第二皇子。本名は葛城皇子という。大兄の号をあたえられて中大兄皇子とも称した。しかし、そのために古人大兄皇子をおす蘇我入鹿と対立していた。
中臣鎌足らと謀りクーデターを起こして蘇我入鹿を殺害し(乙巳の変)、叔父・孝徳天皇を即位させ、自身は皇太子となった。そして大化という元号を制定し、様々な改革を行なった(大化の改新の中心人物)。また、有間皇子などのちのちクーデターを起こしそうな勢力を罠に嵌めて死刑とした。
孝徳、斉明(皇極重祚)の皇太子として天皇制確立を目標とする政治改革を断行し、公地公民制度の実現をめざした。白村江(はくすきのえ)での唐・新羅連合軍に大敗した後、都を飛鳥から近江大津宮に移して即位。後世の戸籍の原形でもある「庚午年籍」(こうごねんじゃく)を作り、近江令を制定し内政を整えた人物でもある。

写真又はカット割り

テーマ及びその関連性

【テーマ】
国家の源流

【テーマとの関連性】
大化の改新(乙巳の変)で蘇我氏を打倒し、天皇を中心とする国家体制の樹立をめざす。中国帰りの留学生を政治・外交顧問として、唐の律令制にならった政治改革、経済制度改革、進んだ大陸文化・技術の導入を積極的に行い、律令国家への道を歩み始める。

天智天皇(中大兄皇子)ストーリー(案)

サブキャスト

中臣鎌足
【役どころ】
蘇我氏体制打倒の意志を固め、中大兄皇子に接近。645年、蘇我蝦夷・入鹿を打倒。この功績から、内臣(うちつおみ)に任じられ、軍事指揮権を握る。669年、死の直前に天智天皇から大織冠を授けられ、「藤原」の姓を賜った。

蘇我入鹿
【役どころ】
蘇我馬子の孫。皇極天皇の即位に伴い、父・蝦夷に代わって政治の実権を握る。聖徳太子の子の山背大兄王を自殺に追い込み、蘇我派の古人大兄皇子の天皇擁立を図る。中大兄皇子らにより、飛鳥板蓋宮の大極殿で暗殺された。

有間皇子
【役どころ】
孝徳天皇の皇子。父・孝徳の死後、蘇我赤兄の誘いをうけ、斉明天皇、中大兄皇子らの打倒を画策するが、赤兄に裏切られて計画が露見。謀反の疑いで捕らえられ、絞首刑となった。

シーン1　大化の改新

蘇我氏は稲目、馬子、蝦夷、入鹿の四代にわたり政権を掌握していた。中臣鎌足は、蘇我氏による専横に憤り、大王家(天皇家)へ権力を取り戻すため、まず軽皇子と接触するも、その器ではないとあきらめる。そこで鎌足は、中大兄皇子に近づく。蹴鞠の会で出会う話は有名。共に南淵請安(みなぶちのしょうあん)に学び、蘇我氏打倒の計画を練ることになった。中大兄皇子は、蝦夷・入鹿に批判的な蘇我倉山田石川麻呂の娘と結婚。石川麻呂を味方にし、佐伯子麻呂、葛城稚犬養網田(かつらぎのわかいぬかいのあみた)らも引き入れる。
645年6月12日、飛鳥板蓋宮にて中大兄皇子や中臣鎌足らが実行犯となり蘇我入鹿を暗殺。翌日には蘇我蝦夷が自らの邸宅に火を放ち自殺。蘇我体制に終止符を打った(乙巳の変)。乙巳の変の直後、皇極天皇は退位し、中大兄皇子に皇位を譲ろうとしたが、中大兄と鎌足との相談の結果、皇弟・軽皇子が即位し、孝徳天皇となり、中大兄皇子が皇太子になった。これは、推古天皇の時、聖徳太子が皇太子で政治の実権を握っていたことを模したものであると推定されている。新たに左右の大臣2人と内臣(うちのおみ)を置いた。さらに唐の律令制度を実際に運営する知識として国博士を置いた。この政権交替は、蘇我氏に変わって権力を握ることではなく、東アジア情勢の流れに即応できる権力の集中と国政の改革であったと考えられている。

写真又はカット割り

シーン2　斉明重祚と有間皇子の変

孝徳は645年12月に都を難波宮に移す。しかし、653年に中大兄皇子が、都を倭京に戻す事を求めた。しかし、孝徳天皇はこれを聞き入れなかったため、中大兄を初めとする皇族達やほとんどの臣下達が倭京に戻ってしまった。皇后の間人皇女でさえ兄に従い、戻ってしまった。失意の中、孝徳天皇は翌年10月に崩御。このため、宝皇女が再び飛鳥板葺宮で斉明天皇として即位した。
有間皇子は、心の病を装って牟婁の湯に療養に行き、飛鳥に帰った後に自分の病気が完治した事を斉明天皇に伝え、その土地のすばらしさを話して聞かせたため、斉明天皇は紀の湯に行幸した。飛鳥に残っていた有間皇子に、中大兄皇子の意を受けたと思われる蘇我赤兄が近づき、斉明天皇や中大兄皇子の失政を指摘し、自分は皇子の味方である事を伝え、斉明天皇と中大兄皇子打倒の計画を練った。
しかし、赤兄の密告によりこの謀反計画は露見し、彼は守君大石(もりのきみおおいわ)・板合部連薬達と捕らえられ、658年11月9日に中大兄皇子に尋問された。その時、有間皇子は「全ては天と赤兄だけが知っている。私は何も知らぬ」と答えた。有間皇子は、11月11日に藤白坂で絞首刑に処せられた。

写真又はカット割り

シーン3　白村江での敗戦と内政改革

百済が660年に唐・新羅に滅ぼされたため、当時日本に滞在していた百済王子・扶余豊璋(ふよほうしょう)を送り返し、百済復興を図った。百済救援を指揮するために筑紫に滞在したが、661年、斉明天皇が崩御した。中大兄皇子はその後、長い間皇位に即かず称制したが、663年、白村江の戦いで大敗し、百済再興は果たせなかった。
白村江の戦以後は、唐軍の報復的な来襲にそなえ、北九州に防人をおき、太宰府に水城、また西日本に烽火をおいて臨戦態勢にはいった。しかし豪族たちが新政策をうけいれてきたのは、朝鮮半島での勝利が前提だった。それが失敗したことで豪族の不満が強まり、中大兄は翌年664年民部・家部など私有民の一部の復活をみとめて懐柔にあたるいっぽう、667年に近江大津宮に遷都し、翌年即位(天智天皇)してその圧力をしのいだ。
また、冠位もそれまでの十九階から二十六階へ拡大するなど、行政機構の整備も行っている。即位後の670年には、我が国最古の全国的な戸籍「庚午年籍」を作成し、公地公民制が導入されるための土台を築いていった。

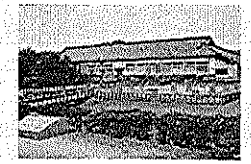
写真又はカット割り

関連する寺院・史跡等と展示例

飛鳥寺(法興寺)

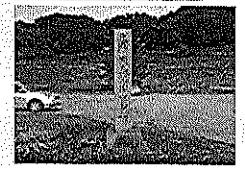
【具体的展示】
■人物紹介(例):
皇極天皇、中大兄皇子、中臣鎌足、蘇我蝦夷・入鹿父子らの人間関係を紹介。
■歴史展示(例):
中臣鎌足と中大兄皇子の出会いの場であることを「蹴鞠」の紹介とともに具体的に解説する。また「入鹿の首塚」伝説についても紹介する。

水落遺跡



【具体的展示】
■人物紹介(例):
斉明朝の皇太子・中大兄皇子の功績を「漏刻」との関わりで紹介。
■歴史展示(例):
斉明期の内政・外交政策の目的を当時の東アジア情勢とともに解説する。

飛鳥稲淵宮殿跡



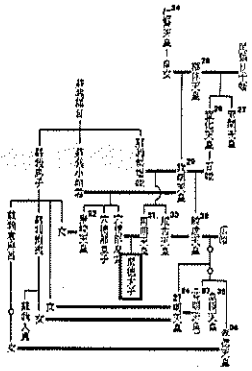
【具体的展示】
■人物紹介(例):
大化の改新後、中大兄皇子をとりまく人間関係を紹介する。
■歴史展示(例):
稲淵宮殿跡の歴史的意義をイラストによる宮殿の復原とともに解説する。

別紙3

聖徳太子(厩戸皇子)

写真又はカット割り

【人物概要】
敏達天皇3年(574)1月1日、用明天皇の第二皇子として誕生。
厩戸の前で出生したことによるとの伝説や叔父・蘇我馬子の家で生まれたことから馬子屋敷が転じて厩戸(うまやど)と付けられたという説もあるが、現在のところ生誕地の近辺に厩戸(うまやと)という地名があり、そこから名付けられたという説が有力である。別名・豊聡耳(とよとみみ、とよさとみみ)、上宮王(かみつみやおう)とも呼ばれた。
父方の祖母は蘇我稲目の娘堅塩媛(きたしひめ)、母方の祖母も同じく稲目の娘小姉君(おあねのきみ)であり、厩戸皇子は蘇我氏と強い血縁関係にあった。幼少時から聡明で仏法を慕んだと言われ、様々な逸話、伝説が残されている。
聖徳太子は当時最大の豪族である蘇我馬子と協調して政治を行ない、隋の進んだ文化をとりいれて天皇の中央集権を強化し、新羅遠征計画を通じて天皇の軍事力を強化し、遣隋使を派遣して外交を推し進めて隋の進んだ文化、制度を輸入した。仏教の興隆につとめ、『国記』、『天皇記』の編纂を通して天皇の地位を高めるなど大きな功績をあげた。



テーマ及びその関連性

【テーマ】仏教伝来と興隆

【テーマとの関連性】
飛鳥寺や法隆寺など各地に寺院を建立したり、朝鮮半島から僧を招いたり、役人に仏教信仰を奨励したり、と仏教興隆を国策として推進していった。

【テーマ】国家の源流

【テーマとの関連性】
太子と馬子の連立政権的状況の中で、遣隋使を派遣して積極的に大陸の文化や政治制度の導入をはかり、官僚制度の確立や歴史書の編纂などを行って、中央集権国家としての体裁を整えていった。

聖徳太子(厩戸皇子)ストーリー(案)

サブキャスト

推古天皇
【役どころ】
第33代天皇。欽明天皇の娘で、母は蘇我稲目の娘・堅塩媛(きたしひめ)。敏達天皇の皇后となり、崇峻天皇暗殺事件後、39歳で即位、日本最初の女帝となった。叔父の蘇我馬子、甥の厩戸皇子とともに中央集権国家樹立を目指した。

蘇我馬子
【役どころ】
敏達・用明・崇峻・推古四代の天皇にわたって朝廷の実権を握った。馬子に反発した崇峻天皇を東漢直駒(やまとのあやのあたいこま)に命じて天皇を暗殺させ、推古天皇を擁立した。

小野妹子
【役どころ】
607年、推古天皇、聖徳太子の意を受け、遣隋使として中国に渡航。「日出処天子」の文言で知られる国書を携え、煬帝(ようだい)の不興を買うが、翌年、裴世清(はいせいせい)らを伴い帰国。煬帝からの返書を百済で紛失し、一時流罪となったが、裴世清の帰国に際して、再び隋に派遣された。

シーン1　崇仏論争と聖徳太子の功績

585年、敏達天皇崩御を受け、父・用明天皇が即位する。この頃、仏教の受容を巡って崇仏派の蘇我馬子と排仏派の物部守屋とが激しく対立。587年、用明天皇が崩御すると皇位を巡って争いになり、馬子は、豊御食炊屋姫(とよみけかしきやひめ)(敏達天皇の皇后)の詔を得て、守屋が推す穴穂部皇子を誅殺。守屋討伐の大軍を起こし、厩戸皇子もこの軍に加わった。討伐軍は河内国渋川郡の守屋の館を攻めたが、軍事氏族である物部氏の兵は精強で、頑強に抵抗し、討伐軍は三度撃退された。これを見た厩戸皇子は、白膠の木を切って四天王の像をつくり、戦勝を祈願して、勝利すれば仏塔をつくり仏法の弘通に努める、と誓った。すると討伐軍は物部軍を攻め立て、守屋は迹見赤檮(とみのいちい)に射殺されて、大豪族であった物部氏は没落した。同年、皇子は物部氏との戦いの際の誓願を守り、摂津国難波に四天王寺を建立した。588年、馬子は泊瀬部皇子(崇峻天皇)を皇位につける。しかし政治の実権は馬子が持ち、これに不満な崇峻は馬子と対立した。592年、馬子は東漢駒(やまとのあやのこま)に崇峻天皇を暗殺させた。

写真又はカット割り

写真又はカット割り

その後、馬子は豊御食炊屋姫を擁立して皇位につけた(推古天皇)。天皇家史上初の女帝である。厩戸皇子は皇太子(聖徳太子)となり、593年4月10日に摂政となり、馬子と共に天皇を補佐した。太子は594年に仏教興隆の詔を発する。翌年、高句麗の僧・慧慈(えじ)が渡来し、太子の師となり「隋は官制が整った強大な国で仏法を篤く保護している」と太子に伝えた。601年、太子は斑鳩の地に宮の造営をはじめ、605年に斑鳩宮に移る。法隆寺は607年に太子によって創建されたというから、斑鳩宮に移った直後にその造営事業にとりかかっていたようだ。また、太子は四天王寺・中宮寺・橘寺・広隆寺・法起寺・妙安寺も創建したと伝えられている。

斑鳩宮で太子は615年までに「法華経(ほけきょう)義疏」「維摩経(ゆいまきょう)義疏」「勝鬘経(しょうまんきょう)義疏」の『三経義疏(さんぎょうのぎしょ)』を編さんした。これらは経典の精密な注釈書で、その高度な内容からは、太子が驚くほど深く仏教の教義を理解していたことがうかがわれる。

写真又はカット割り

シーン2　外交政策と大陸文化の受容

600年、新羅征討の軍を出し、調を貢ぐことを約束させる。602年、再び新羅征討の軍を起こし、同母弟・来目皇子を将軍に筑紫に2万5千の軍衆を集めたが、渡海準備中に来目皇子が死去(新羅の刺客に暗殺?)。後任には異母弟・当麻皇子が任命されたが、妻の死を理由に都へ引き揚げ、結局、遠征は中止となった。この新羅遠征計画は天皇の軍事力強化が狙いで、渡海遠征自体は目的ではなかったという説もある。
607年、小野妹子、鞍作福利(くらつくりのふくり)を使者とし隋に国書を送った。「日出(い)づる処(ところ)の天子」で始まる国書に隋の煬帝(ようだい)は激怒したが、翌年に裴世清(はいせいせい)を日本に派遣し、国交が結ばれたのは有名な話である。『日本書紀』によると裴世清が携えた書には「皇帝問倭皇」(「皇帝　倭皇に問ふ」)とある。これに対する返書には「東天皇敬白西皇帝」(「東の天皇 西の皇帝に敬まひて白す」)とあり、隋が「倭皇」とした箇所を「天皇」としている。

写真又はカット割り

シーン3　中央集権体制樹立への歩み

593年、推古天皇から摂政に任命され、これより推古・蘇我馬子・聖徳太子の3人を中心とした政治が始まる。603年12月5日、冠位十二階を定めた。これは役人の地位を大徳から小智までの十二段階に分け、個人の業績によって位を与える制度である。氏姓制ではなく才能を基準に人材を登用し、天皇への中央集権を強める目的があったが、馬子たち主要な氏族はこの範囲外であった。また604年4月3日、十七条憲法を制定した。「和を以(もっ)て貴(とうと)しとなす」で始まる憲法は、今でいう役人の規則である。豪族たちに臣下としての心構えを示し、天皇に従い、仏法を敬うことを強調している。
605年、太子は斑鳩宮へ移り、620年、聖徳太子は馬子と議して『国記』、『天皇記』などを編集した。聖徳太子には、刀自古郎女(とじこのいらつめ)をはじめ4人の妃がいたが、最も愛する膳大郎女(かしわでのおおいらつめ)とほぼ時を同じくして、622年にこの世を去った。遺体は、河内の磯長(しなが)(現大阪府太子町)に葬られた。

写真又はカット割り

聖徳太子(厩戸皇子)エピソード

太子には、没後早くから様々な伝説がうまれた。一度に八人の言葉を聞き分けたとか、観音菩薩の化身であるとか、聖武天皇に生まれ変わって大仏を造立したなどといった伝説である。
特に『日本書紀』にみえる太子が片岡の地(現在の香芝市・王寺町付近)で、飢者に出逢い食物や衣服を与えた。飢者の死後、墓を造り手厚く葬った。のちに太子の命により墓を調べると死体は消えていたという伝承は、その後様々なかたちで語り伝えられた。
また、中世以降、法隆寺や四天王寺(大阪市)、叡福(えいふく)寺(大阪府太子町)を中心に、奇跡をおこす英雄としての太子信仰が世の中に広まっていった。

万葉文化館

【具体的展示】
■人物紹介(例):
パネル展示を基本に、例えばフィギア(人形)を設置
■歴史展示(例):
パネル展示
名場面紹介の映像(数分間)

橘寺

【具体的展示】
■人物紹介(例):
聖徳太子(厩戸皇子)誕生伝説をイラストで紹介
■歴史展示(例):
聖徳太子と橘寺との関わりを解説ボードで紹介

小墾田宮跡

【具体的展示】
■人物紹介(例):
推古天皇、聖徳太子、蘇我馬子らの功績を紹介
■歴史展示(例):
宮の復原イラスト
推古朝の政治を解説ボードで紹介

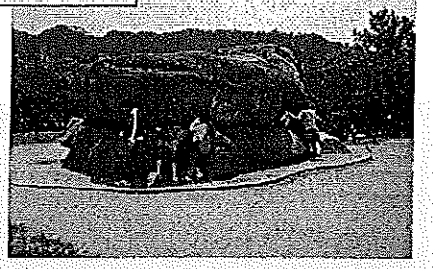
別紙4

飛鳥京跡苑池復原イメージ（案）

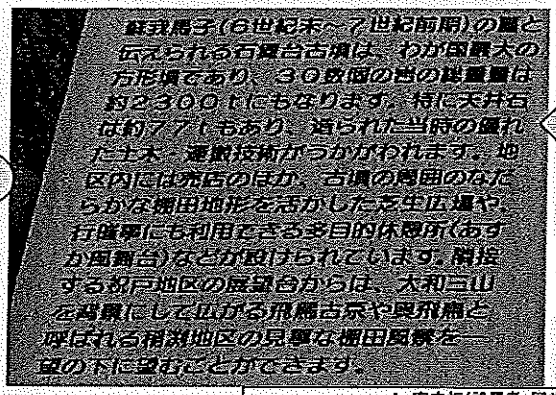
別紙5

石舞台古墳における案内板の現状

石舞台古墳



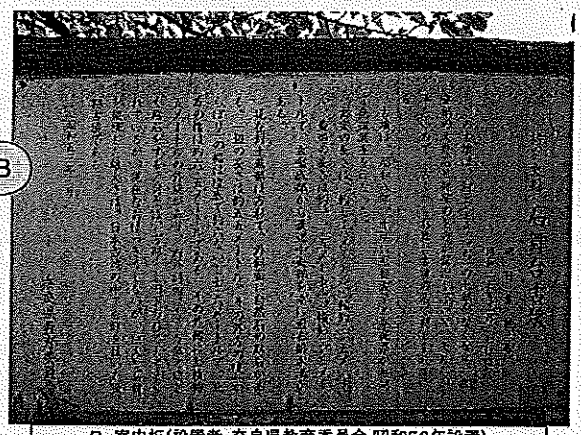
A



英語・ハングル

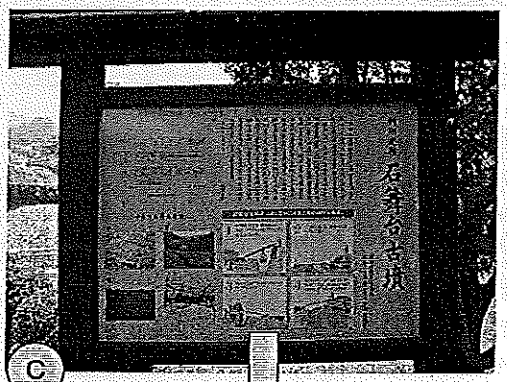
A 案内板(設置者:国営飛鳥歴史公園事務所)※英語・ハングル表記あり

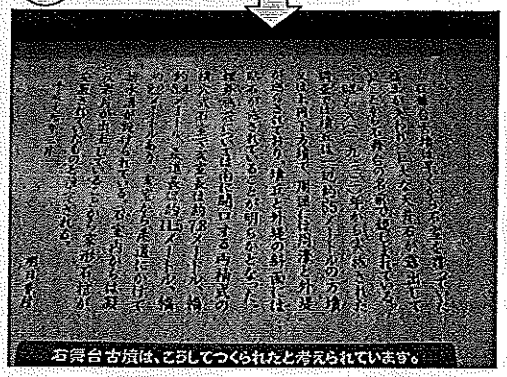
B



B 案内板(設置者:奈良県教育委員会 昭和53年設置)

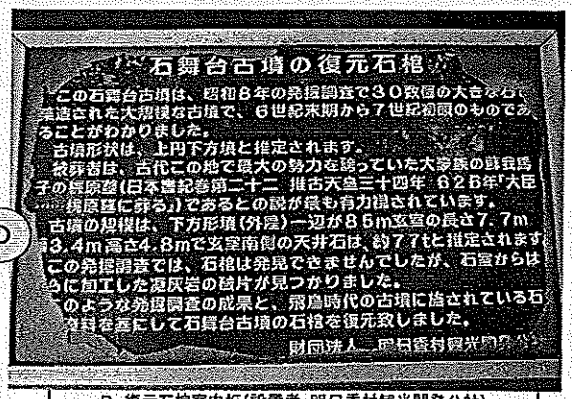
C





C 案内板(設置者:明日香村 平成19年設置)

D



D 復元石棺案内板(設置者:明日香村観光開発公社)

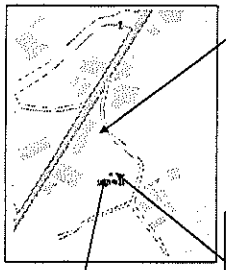
A 国営飛鳥歴史公園事務所設置の案内板
・蘇我馬子の墓と伝えられる…と記載　・形状説明　・周辺説明 → 祝戸からは棚田が眺望できる

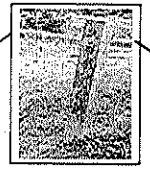
B 奈良県教育委員会設置の案内板
・発掘調査の状況説明…昭和8,10年 京大と奈良県が共同調査　・長さや高さなどの形状説明

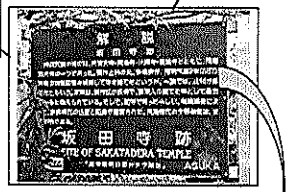
C 明日香村設置の案内板
・長さや高さなどの形状説明　・石舞台古墳の作られ方の解説

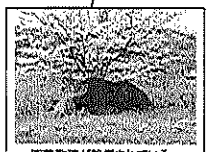
D 明日香村観光開発公社設置の復元石棺案内板
・蘇我馬子の墓という説有力視されている…と記載　・長さや高さなどの形状説明

解説板の現況例（坂田寺跡の場合）









万葉歌碑が設置されている

現況

現況は、県道から脇にそれた坂道沿いの小さな水田の角に、やや斜めになった「坂田金剛寺址」と刻まれた石柱があり、その水田の一段上に小さな公園があって、その入口近くに上記の解説板が設置されている。また公園内には、明日香村内に 32 ヵ所ある「万葉歌碑」の一つが設置されている。

問題点が多い

寺の建物が残っていないので、案内表示板をわかりやすくすることで対応する。

◆気をつけて探していないと、見落としてしまう。

◆坂田寺が「歴史的にどのような意味をもっているのか」を示した解説は、「飛鳥五大寺の一つ」の部分のみで、なぜ五大寺の一つにあげられていたのかがわからない。

◆この解説板では、建物の大きさや伽藍配置、実際どの場所に建物があったのか、など全くわからない。

◆今まで十数回にわたって発掘調査が行われているが、「奈良時代の仏堂と回廊が確認された」と書いてあるだけで、発掘成果もほとんど紹介されておらず、ここに大きな寺院があったことすら想像できない。

「歴史展示」の解説板の新設により対応する。 A

「歴史物展示」の解説板の充実により対応する。 B

持統天皇の時には、大官大寺・飛鳥寺・川原寺・豊浦寺とともに、飛鳥五大寺の一つであった。鞍作止利の父、多須奴が、用明天皇2年(587)天皇の病気回復を祈願して寺を建てたというが、一説では、止利が建てたともいう。本来は、鞍作氏の氏寺で、渡来人の建てた寺として最古であると伝えられている。そして、尼寺であったらしい。発掘調査によって、奈良時代の仏堂と回廊が確認された。飛鳥時代の主要伽藍は、まだ不明である。

A

歴史展示解説

Explanation of history exhibition
历史展示解说
역사전시의 해설

坂田寺って、何？

What place is the Sakatadera temple?
坂田寺院是什么吗？
사카타 데라 말이 어떤 곳입니까?

日本での仏教発祥の地!?

It is a Buddhism birthplace in Japan !?
在日本的佛教发祥地 !?
일본에 있어서의 불교발상지다 !?

渡来人の司馬達等は、私的に仏教を信仰していたが、蘇我馬子の依頼を受け、娘の嶋ら3人の女性を出家させ、日本での仏教興隆に大きな役割を果たした。『扶桑略記』に「鞍作村主司馬達等、大和国高市郡坂田原に草堂を営む」とあり、この地が日本における「仏教発祥の地」なのかもしれない。

Packhorse driver Soga's request was received, three women including daughter Shima were made to become a priest, and it played a major role to the Buddhism rise in Japan.

소가노마요 의 의뢰를 받고, 딸의 시마를 3 명의 여성을 출가하게 해, 일본에서의 불교번성에 큰 역할을 다했다.

船来人司马们等，私人信仰着佛教。受到苏我马矢的委托，让女儿岛们 3 个女性出家。在在日本的佛教兴隆里充成了大的作用。

渡来人ゆかりの地だよ

Those who introduce relation ground
船来人因缘的地
도래인 연고지

司馬達等の子の鞍作多須奴、または孫の鞍作止利が寺を建立したとの記録が残っており、坂田寺は渡来系氏族・鞍作氏の氏寺である。司馬達等は、6世紀頃に馬具の製作技術集団を率いて、朝鮮半島から渡来したが、中国の梁という国の出身との伝承もある。

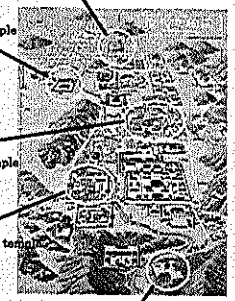
The record that Kuratsukuri-no-tasuna of the child of Shiba-tatsuto or grandchild's Kuratsukuri-no-tori erected a temple remains. Sakatadera is person Kuratsukuri's in those who introduce system clan's temple.

시바타쓰토 의 아이의 쿠라쓰쿠리노타스나,또는 손자의 쿠라쓰쿠리노토리 가 절을 건립했다라는 기록이 남아있다. 사카타절은 도래계 씨족의 쿠라쓰쿠리씨의 씨절이다. 시바타쓰토는, 6세기경에 마구의 제작 기술자집단을 거느리고, 한반도에서 도래했다.

司马们等的孩子的鞍作多须奴，或孙子的鞍作止利修建了寺院的这样的记录残留着。坂田寺院是船来系氏族的鞍作品先生的先生寺院。司马们等，6 世纪左右带领马具的制造技术集体，从朝鲜半岛船来。

「飛鳥五大寺」の一つですよ

One of ASKA of five minsters
飞鸟的五大寺之一
아스카의 5 대사원의 하나



現在地はここだよ。
The present place is here.
現在地是这里
현재 땅은 여기입니다.

奈良県

B

坂田寺跡

Site of Sakatadera temple
坂田寺迹
사카타 데라아토

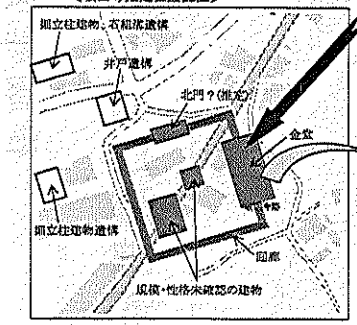
／高市郡明日香村大字阪田

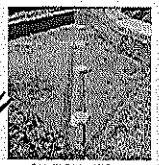
＜関係年表＞

戊午年	(538)	百済の聖明王が仏像と経典を伝える。(上宮聖徳法王帝説、元興寺縁起)
欽明 13	(552)	百済の聖明王が仏像と経典を伝える。(日本書紀)
用明 2	(587)	穴部多須奴、天皇の為に仏像と寺を作る。
推古 1	(593)	聖徳太子が摂政となる。
推古 4	(596)	飛鳥寺が完成する。
推古 11	(603)	冠位十二階を制定する。
推古 12	(604)	十七条憲法をつくる。
推古 14	(606)	鞍作止利、飛鳥大仏を造る。それを飛鳥寺に安置した功績により領地を賜り、金剛寺を造営する。
推古 15	(607)	小野妹子を隋に派遣する。
推古 30	(622)	聖徳太子が没する。
推古 31	(623)	鞍作止利、法隆寺金堂釈迦三尊像を造る。
朱鳥 1	(686)	故天武天皇の百ヶ日法会を、大官、飛鳥、川原、豊浦、坂田の五大寺で行う。
天平 9	(737)	信勝尼が経典を内裏に進上する。
天平勝宝 1	(749)	東大寺大仏殿に東脇侍を献納する。
10 世紀後半		土塔崩れで倒壊する。

※司馬達等の子が鞍部(作)多須奴。その子が止利。

＜坂田寺推定伽藍配置＞

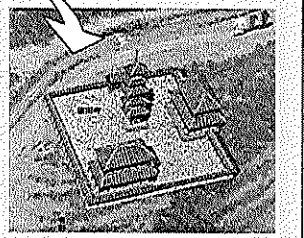




＜仏堂跡遺構＞

＜主な出土物＞

＜復原想像図＞



こんな感じのお寺だったんだよ。

奈良県

B

坂田寺解説　<Explanation of Sakata temple　坂田寺院解说　사카타절의 해설>

奈良県

平安時代(11 世紀末)の『扶桑略記』に「鞍作村主司馬達等、大和国高市郡坂田原に草堂を営む」とあり、『日本書紀』の記述とあわせて、坂田寺の創建年代については諸説がありますが、鞍作氏の氏寺として、飛鳥寺とならび最古級の寺院と推定されています。飛鳥時代の伽藍は未発見ですが、出土土器や瓦からその存在が伺えます。その後、朱鳥元年(持統称制期)には、大官大寺・飛鳥寺・川原寺・豊浦寺とともに飛鳥の五大寺にあげられています。

奈良時代には、信勝尼が天平9年に経典を内裏に進上したこと、天平勝宝元年に東大寺大仏殿の東脇侍を献納したことが記録に残っています。これらの記事と前後する時期の伽藍が、これまでの調査で判明しています。平安時代以降については明らかではありませんが、10 世紀後半に土砂崩れで倒壊していることが判明しています。『多武峰略記』には、承安2(1172)年に多武峰の末寺になっていたことが記されており、現在の金剛寺のことと考えられます。

これまでの調査によって、寺域は山側から飛鳥川に向かって傾斜地を削平して造成して平坦面を作り出し、中心部は東西 63m、南北 56m のほぼ正方形に回廊がめぐり、その東面回廊に二重基壇をもつ金堂が取り付きます。中門は、金堂の対面(西側)にはなく、北面回廊に推定されています。回廊の内側に二棟の基壇建物があったようですが、その規模や性格は明らかではありません。回廊の外側は、金堂の背後には礎壇具をもつ基壇建物があり、回廊の西側には掘立柱建物、北側には井戸や石組溝が見られます。また、出土物としては、奈良時代の須恵土器、金属製品、和同開珎、木簡などがあり、奈良時代の坂田寺の様子は徐々に判明してきていますが、飛鳥時代については今後の課題です。

In "Fuso-Ryakuki" at the Heian era,Kuratsukuri-no-suguri-Shiba-Tatsuto build the temple in Yamato country Takaichi county Sakatahara. Another theory is in"Nihon-Syoki". There are various opinions about the creation age of the Sakata temple. Here is a Mr. temple of the Kuratsukuri family. It is presumed that it is Asuka-dera Temple and queues up and is a buddhist temple of the oldest class.
The existence can be presumed from the excavation earthenware and the tile though the cathedral of the Asuka age is a undiscovery. Afterwards, it was enumerated with Daikandaiji, Asuka-dera, kawahara-dera, and Tbyura-dera in "Asuka 5 Big Temple" in the Jito emperor period.
Shinsyouni presented the imperial palace the sutra in years of nine of "Tenpyo" at the Nara era. In years of first of "Tenpyo-hoji", the record that the Sakata temple dedicated east-wakiji to the Todaiji Temple great image of buddha lord remains. The appearance at the time that these do the article and back and forth turns out in a current investigation. The appearance since the Heian era is not so understood. It turns out that here has collapsed because of the landslide in the latter half of the tenth century. It seems, this is present "Kongo-ji Temple" though it is recorded that it is a branch temple of "Tonomine Temple " in "Tonomine-ryakuki" in 1172.

平安时代的『扶桑略记』有「对鞍作品村主司马们等，大和国高市郡坂田原建草堂」。配合『日本书纪』的记述，关于坂田寺院的创建年代有诸说。关于鞍作品先生的先生寺院，与飞鸟寺院并列被推定最古级的寺院。飞鸟时代的伽蓝是未发见，不过，由出土土器和瓦而个存在能探访。此后，在红鸟元年(持统称制期)时，与大官大寺・飞鸟寺院・河原寺院・丰浦寺院一起被飞鸟的五大寺发现。
奈良时代，信胜尼姑天平 9 年内背面献上了经典。天平胜宝元年捐献了东大寺大佛先生的东胁武士的平留存着在记录中。这些的记述和一前一后的时期的伽蓝，用到现在为止的调查判明明瞭。不明显平安时代以后，不过，10 世纪后半由于砂土崩溃倒塌的事实明瞭。在『多武峰略记』里，1172 年成为多武峰的分寺院的事被记下，能考虑现在的金刚寺的事。

헤이안 시대의 「부조약기」에 사카타 절이 씌어져 있다. 「일본서 기」에는 다른 기술이 있어, 사카타 절의 창건 년대(연대)에 대해서는 제설이 있다. 사카타 절은, 안장작씨의 씨절로서, 아스카절과 비금가 최고급의 사원과 추정되고 있습니다.
아스카시대의 가람은 미발견입니다만, 출토 토기나 기와로 그 존재를 엿볼 수 있습니다. 그 후, 가정 오사무 전장기에는, 대관 오데라・아스카절・강변절・도요우라절과 함께 아스카의 5 오대라에 들어져 있습니다.
나라 시대에는, 노부까쓰 비구니가 텐표 9 년에 경전을 금중에 진상한 것, 텐표 쇼쓰보쿠 원년에 도다이사 대불전의 협가시와키 사무라이를 헌납한 것이 기록에 남아있습니다. 이것들의 기사와 전후하는 시기의 가람이, 지금까지의 조사로 밝혀지고 있습니다. 헤이안시대 이후에 대해서는 명확하지 않습니다만, 10 세기 후반에 산사태에서 부서지고 있는 것이 밝혀지고 있습니다. 『다무형약기』 에는, 1172 년에 도우노미네의 본산 지배하의 절이 되고 있었던 것이 기록되고 있어, 현재의 곤고지와 생각됩니다.

別紙 6

明日香における歴史展示等のあり方基本方針

作成年月　平成２２年３月
作　　成　奈良県地域づくり支援課